

VI 教育委員会・学校と大学が連携した現職教員の育成の充実に向けた今後の取組

- これからの学校は、常に新しい情報等を得ながら、様々な教育課題に的確に対応していくことが求められることから、豊富な知見を有する大学が教育委員会や学校等が実施する現職教員研修を支援するとともに、共同研究等を推進していくことが必要である。
- こうした取組を推進するため、県教育委員会が作成した、県内の大学教員の教育に関する研究の実績や学校支援の実績などがわかるデータバンクを活用するとともに、大学においても、学校現場が抱える教育課題等に関する研究を推進していく必要がある。
- 県教育委員会は、教員が知識・技能を絶えず刷新し、変化に対応できる視野の広さと高度の専門性を持ち続けるため、現職教員の研修体制を見直すとともに、大学における知を活用し、現場で実践を積み重ねていく中で見つかる課題を学び直すことができる仕組みづくりや学校運営に関する資質能力を身につける学びの充実など、学び続けるための新たな仕組みを構築する必要がある。

1 教育委員会や学校等が実施する現職教員研修の大学による支援や共同研究の推進

- 県教育委員会は、やまぐち総合教育支援センター等において、体系的な教職員研修を実施するとともに、市町教育委員会においても、それぞれの教育課題を踏まえた研修を実施しているところである。また、学校においても、授業研究等様々な校内研修が行われるとともに、教員も、自発的な研修等によって、学び合い、高め合いながら資質能力の向上に努めているところである。
- 教育を取り巻く環境は急速に変化しており、これからの学校は、常に新しい情報等を得ながら、複雑化・多様化する教育課題に的確に対応していくことが求められている。
- このため、教育委員会や学校等が実施する研修や各校種単位で実施している教育研究会等の研究団体の研究・研修等に、新たな知見を有する大学教員がアドバイザー等として参加したり、共同研究を行ったりするなどして、これらの研修等を支援していく取組を進めていく必要がある。
- 大学にとっても、これらの取組を通して、学校現場が抱える教育課題等を把握することが可能となり、研究と実践の融合が図られ、双方にとって効果があると考えられる。
- 県教委と大学が連携するだけでなく、市町教委と大学が連携していくことも重要である。例えば、小・中学校で取り組まれている「若手人材育成の強化・加速 1,000 日プラン」における「人材育成スペシャリスト会議」に大学も参加し、送り出した学生の成長過程を追跡すると、大学における教育課程の充実にもつながるのではないかと。

(データバンクの作成による情報提供)

- こうした取組を推進するため、県教育委員会は、県内の大学教員の教育に関する研究の実績や学校支援の実績などがわかるデータバンクを作成するなどして、学校等が研修内容に応じて大学教員を招聘しやすいような体制づくりに努める必要がある。

- 上記意見を踏まえ、大学の教員研究内容や専門分野等に加え、教育委員会による教師力向上指導員の実績等をまとめたデータバンクを作成し各学校に配布した。データバンクを積極的に活用し、各学校の教育内容の充実や教員の指導力の向上を図ることが望まれる。

(大学における学校現場の教育課題についての研究の充実)

- 大学教員が学校現場の実態を踏まえた的確な指導助言を行うため、大学においても、県内の学校現場が抱える教育課題等に関する研究をより一層推進していく必要がある。

2 教員が学び続けるための体制づくり

- 教育を取り巻く環境が急速に変化する中、これからの教員は、知識・技能を絶えず刷新し、変化に対応できる視野の広さと高度の専門性を持ち続けるため、探究力を持ち、学び続ける存在であることが必要である。
- また、教員は教職経験を積み重ねる中で、求められる役割や資質能力も変化していくことから、こうした観点からも、教員は学び続けることが必要である。
- このため、県教育委員会は、教員が学び続けるための体制づくりに向けて、現職教員の研修体制を見直すとともに、大学における「知」を活用し、学び続けるための新たな仕組みを構築する必要がある。

(実践を積み重ねていく中で見つかる課題を学び直すことができる仕組みづくり)

- 学校現場で実践を積み重ねていく中で見つかった課題を学び直すことができる仕組みが必要である。特に、初任研終了後の2、3年目の若手教員は実践を通して、自分の課題が見えてくる頃であり、良い教員になりたい、良い授業がしたいと研修意欲が最も高まる時期である。教員になって何年か経験した早い段階で、自分が学びたい新たな課題が生じた時に、希望者が学び直すことができるような仕組みづくりを進める必要がある。
- 中でも、小学校の教員については、幅広い分野の授業を行うこととなる。大学では研究室に所属し、特定の分野についての研究を深める形になっているが、教員になり、教壇に立って、初めて、自分の苦手分野に気がつくこともある。そういった苦手分野の克服に向けた研修が必要である。県教育委員会が研修体系等の中で、そうした仕組みをつくることも重要である。

(学校運営に関する資質能力を身につける学びの充実)

- 教員の大量退職に伴い、管理職が急速かつ大量に入れ替わる中、将来、管理職として、または分掌の主任等として、学校全体を見渡してマネジメントしていく力を身につけた人材を計画的に育成していくことが必要である。

- 特に、中堅教員は、近い将来、学校運営の責任者や中核を担う人材であるが、これまで校務分掌の主要な役割を層の厚いベテラン教員が担っていたため、学校運営に関する経験が浅い状況が見受けられる。こうした中堅教員が、管理職や学校運営の中核を担うこととなった時に、的確に職責を果たすことができるよう、学校運営に関する資質能力を身につけさせることが求められている。

(管理職研修の充実)

- 急速に増加する複雑化・多様化した教育課題に迅速かつ的確に対応できるよう、学校運営の責任者として、管理職の資質能力に向けた取組を進める必要がある。
- 管理職は、学校運営全般において責任者としての役割が求められ、強いリーダーシップとともに、様々な教育課題に的確に対応できる連絡調整能力や情報収集能力、危機管理能力等、学校マネジメントに関する幅広い資質能力が求められる。
- こうした管理職に求められる資質能力は、学校における教職経験の積み重ねとともに、新たな学びにより培われるものもある。このため、管理職を対象とする研修はもとより、管理職候補者名簿登載後の研修も充実させていく必要がある。
- 県教委と大学が連携して実施するスクールリーダー研修講座の実施に当たっては、県内の他の大学との連携による地域分散型の実施方法も検討が求められる。
- スクールリーダー研修講座の研修内容は、市町教委における管理職や中堅教員への研修にも参考になることから、指導主事等の参加など対象者を拡大したり、市町教委に資料を提供したりするなど、研修成果を広めていくことが必要である。
- 管理職を養成するためには、管理職を担うことのやりがいを発信し、モチベーションを高揚させることも必要である。

(県の研修体系の見直し)

- 新規採用後2、3年目に実施するフォローアップ研修から10年経験者研修の前後に実施する職務別研修までの間、そして、職務別研修後の長い教職生活の間に、希望に応じて、新たな学びを行うことができる仕組みを設けることにより、自ら学ぼうとする高い意欲をもつ者が、学び続ける仕組みづくりが必要である。
- スクールリーダー研修で実施している学校組織マネジメント等の研修内容は、30歳代前半の若年中堅教員にも是非必要であり、受講対象を拡大したい。また、やまぐち総合教育支援センターでの中堅研修の一層の充実を図ることも必要である。

Ⅶ 教職大学院の設置に向けた取組

- 現在、教職大学院の設置に向けた取組が全国的に進んでおり、国の方向性としては、各都道府県に一つは教職大学院を設置することとしている。
- 教職大学院は、高度専門職業人の養成に特化した大学院であり、新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員の養成や、地域や学校において指導的役割を果たし得るスクールリーダーの養成を目的とし、理論と実践の融合した教育内容、実践的な指導方法を用いるなどの特色を有している。
- 本県においては、山口大学が「教育実践開発コース」と「学校経営コース」の二つのコースを有し、現職教員については、学校を学びの場として、学校や地域の課題解決に資する実践研究を大学教員が支援していく福井大学教職大学院の拠点校方式を参考とした教職大学院を平成 28 年度に設置する方向で現在、検討されている。

- 現在、教職大学院の設置に向けた取組が全国的に進んでおり、国の方向性としては、各都道府県に一つは教職大学院を設置することとしている。
- 本県においては、現在、山口大学が教職大学院の設置に向けて検討を始めているところであり、設置に際しては、本県教育の実情や県内の学校現場のニーズを踏まえ、教員の資質能力の向上とともに、学校や地域の課題解決に資する教職大学院とされることが重要である。

1 教職大学院の目的・特色

- 教職大学院は、高度専門職業人の養成に特化した大学院であり、①学部段階で教員として基本的な資質能力を習得した者を対象とした、新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員の養成、②現職教員を対象とした、地域や学校において指導的役割を果たし得るスクールリーダーの養成を目的としている。
- 従来の修士課程と比較した特色として、①理論と実践を融合した教育内容・方法、②事例研究、フィールドワーク、ディスカッションなど、実践的な指導法を用い、そのために4割以上の実務家教員が必置とされていること、③研究指導や修士論文は課されないこと、④大学院の運営全般において学校、教育委員会等と連携することなどがあげられる。

2 教職大学院に期待すること、今後の検討事項等（平成 25 年度）

- 教職大学院には、若手教員の指導力や中堅・ベテラン教員のマネジメント能力を育成・向上させる機能や、管理職として将来学校運営を担う人材を育成する機能が求められる。また、山口県の教育課題を研究し、学校現場を支援する機能も必要である。
- 学校経営コースの教育内容については、学校組織マネジメントに関する内容や、法規や教育行財政学、危機管理などに関する内容を充実させることが望ましい。また、大学教員と大学院に在籍している現職教員等が、学校評価における第三者評価やコミュニ

ティ・スクールに委員やアドバイザー等として関わることにより、学校組織マネジメントを学校現場において学ぶことも考えられる。

- 教育実践開発コースの教育内容については、確かな授業力や生徒指導に関する力等を徹底して育成するとともに、子どもや保護者、地域住民等とのコミュニケーション能力など教職に求められる総合的で豊かな指導力、人間力を育成する内容を充実させることが望ましい。また、スクールリーダーとして、研修活動を積極的に創造・推進する力を身につけることができる内容なども考えられる。
- 教育・研究方法等については、学校現場での実践を中心とし、学部卒大学院生、若手教員、中堅・ベテラン教員など多様な人材の交流による相互の資質能力の向上や、ICTを活用した授業展開、科目等履修が可能なカリキュラム、一部講座の開放講座としての実施などにより、より多くの現職教員が学べる仕組みづくりについても検討する必要がある。
- また、県内大学間の連携・協力が必要であり、学校や他大学等との連携の中心となる組織の設置についても検討する必要がある。
- その他、県内他大学を卒業した学生が、教職大学院に入学できるシステムや、教職大学院修了者に対する教員採用に当たっての特例措置、既に修士課程を修了した者に対する教職大学院への入学に当たっての特例措置などについても検討する必要がある。

(1) 設置するコースや対象等について

(若手教員の指導力や中堅・ベテラン教員のマネジメント能力の育成を図る教職大学院)

- 若手教員の段階において、現場で実践を積み重ねていく中で見つかる課題を学び直すことができる仕組みづくりや、中堅・ベテラン教員の段階において、学校運営に関する資質能力を身につける学びの充実など、教員が学び続けるための新たな仕組みが求められているところであり、そのような機能を担うことが望まれる。
- また、教員の大量退職により、これまで学校の中核を担っていた多くのベテラン教員や管理職が退職し、教職経験の比較的浅い若手教員の増加が見込まれることから、若手教員の指導力や中堅・ベテラン教員のマネジメント能力を育成・向上させる仕組みとともに、管理職として将来学校運営を担う人材を育成する機能が求められる。

(県の研修体系と一体化し、学び続ける体制を構築する教職大学院)

- 新規採用後2、3年目に実施するフォローアップ研修から10年経験者研修の前後に実施する職務別研修までの間、そして、職務別研修後の長い教職生活の間に、希望に応じて、新たな学びを行うことができる仕組みを設けることにより、自ら学ぼうとする高い意欲をもつ者が、学び続ける仕組みづくりが必要であるという指摘もある。

- 若手教員を対象とする「教育実践開発コース」、中堅・ベテラン教員を対象とする「学校経営コース」は、この期間において、自ら学ぼうとする高い意欲をもつ者が、学び続ける仕組みづくりにつながるものである。

(2) 教育・研究内容等について

(山口県の教育課題の研究・支援)

- 実践的指導力の育成などの教員の養成・育成とともに、教職大学院の設置により、大学の研究機能も充実させていく必要がある。教職大学院には現職教員が在籍することから、学校現場と連携を図り、山口県の教育課題を研究し、学校現場を支援する機能を有することが望ましい。
- 例えば、本県には、320校のコミュニティ・スクールがあり、全国的にもその指定率は高く、多くの学校が、地域と連携した学校づくりに取り組んでいる。今後、地域とともに学校運営を行うことが重要になってくる。また、近年では学力の向上にも力を入れている。「コミュニティ・スクール学」や「学力向上学」といった研究・教育を行い、講座・演習を開講することにより、他大学にはない山口県に設置される教職大学院ならではの特色をつくっていくことも必要である。

(学校経営コースの教育内容)

- 管理職としての資質能力には、現場で培う力と専門家からの学びから身に付く力があるという指摘がある。また、一般の教員と、管理職では、求められる役割や資質能力も異なることから、これまでの教職経験に加えて、意識改革が求められる。意識改革のためには、経験と新たな学びが必要である。こうしたことから、新たな学びとして、学校組織マネジメントに関する内容、法規や教育行財政学、危機管理などに関する教育内容を充実させることが望ましい。
- 学校経営コースの機能として、学校評価における第三者評価の役割を担うことも考えられる。学校現場では、教育活動等の成果を検証し、学校運営の改善につなげる学校評価の取組を進めている。学校評価の取組においては、各学校の教職員が行う「自己評価」、保護者、地域住民等の学校関係者などにより構成された評価委員会等が、自己評価の結果について評価する「学校関係者評価」、学校運営に関する外部の専門家を中心とした評価者が、専門的視点から行う「第三者評価」がある。多くの学校で自己評価、学校関係者評価は実施しているが、第三者評価については、専門家や体制が整っておらず、実施に至っていない状況がある。学校経営コースの大学教員と大学院に在籍している現職教員等でチームを編成し、委員やアドバイザー等として、第三者評価を行うことにより、県内学校の学校運営の改善、教育水準の向上に資するとともに、現職教員の院生についても学校マネジメントを学ぶ貴重な機会となると考える。

- また、コミュニティ・スクールにおいて、学校運営の基本方針の承認や、教育活動などについて意見を述べるといった取組を行う「学校運営協議会」に関わることも、学校現場において、学校マネジメントを学ぶ貴重な機会となると考える。

(教育実践開発コースの教育内容)

- 学部の段階で育成される教員としての基礎的・基本的な資質能力を基盤として、確かな授業力や生徒指導に関する力等を徹底して育成する教育内容とともに、子どもや保護者、地域住民等とのコミュニケーション能力をはじめとする教職に求められる総合的で豊かな指導力、人間力を育成する教育内容とし、教員としての高度の実践力・応用力を幅広く育成していくことが望ましい。
- また、若手の現職教員については、卓越した教育実践力の育成とともに、スクールリーダーとして、地域や校内の協働的な研修活動を創造・推進する力を身につけることができる教育内容とすることが望ましい。

(3) 教育・研究方法等について

(学校現場での実践を中心として、課題解決や資質能力の向上を図る仕組みづくり)

- 現職教員については、勤務校が学びの場であり、教員としての業務が学びの中心であるという基本的な考え方の下、学校現場で勤務しながら課題解決や教員の資質能力の向上を図る仕組みが望ましい。
- 学部を卒業して教職大学院に入学する院生（以下「ストレートマスター」）や比較的教職経験の浅い若手教員については、事例研究、模擬授業、授業観察・分析など、学校現場での実践を通して、資質能力の向上を図る仕組みが望ましい。
- こうしたことから、大学の実務家教員、研究者教員とストレートマスターの学生、既に教職経験のある大学院生がチームを組んで学校や市町教育委員会に出向いて、学校の課題を前向きにとらえ、学校とともに課題解決を進めるような、学校現場で指導・支援、研究をするような仕組みについて検討すべきである。

(多様な人材の交流による資質能力の向上)

- 教職大学院に在籍する院生が、コース等の壁を越えた交流を行うことにより、相互の資質能力の向上を図る仕組みとすることが望ましい。教職大学院においては、学生としては、ストレートマスター、若手教員、中堅・ベテラン教員、大学教員としては、実務家教員、研究者教員など多様な人材の交流が可能となる。こうした多様な人材が相互に関わり交流することにより、大きな教育効果が期待できる。例えば、中堅・ベテラン教員にとっては、ストレートマスターや若手教員との交流が、人材育成の方法等について、実践を通して学ぶ場ともなる。

(開放講座を開講するなど「開かれた教職大学院」)

- 教職大学院で養成・育成する人数は限られるが、学位や大学院、期間などにこだわらず、ICTを活用した授業展開や長期休み期間の重点学習、科目等履修として授業展開し、将来的に学位が取れるシステムの構築など、長期的な支援を念頭に、より多くの現職教員が学べる環境づくりについても検討する必要がある。
- また、講座によっては、開放講座として開講し、教職大学院の学生だけでなく、より多くの現職教員等が最新の研究実践を学ぶような機会を設けることも検討する必要がある。

(4) 教職大学院の運営等について

(学校や他大学等との連携の中心となる組織の設置)

- 学校現場での実習・実践が中心となる教職大学院においては、大学教員が学生の指導・支援や研究に専念することができるよう、学校現場とつながりのあるスタッフを配置し、大学と学校等の連絡調整を専門的に行う組織・機関の設置についても検討する必要がある。

(県内大学間の連携・協力)

- 県内の教員養成課程を有する大学が立ち上げの段階から、それぞれの専門性を生かしながら、何らかの形で参画することにより、県内の教育養成課程のレベルアップにつなげることが望ましい。
- また、県内大学を卒業した学生が、教職大学院に入学できるシステムをつくることも検討し、山口県全体の教員養成課程の充実に資するような仕組みとすることが望ましい。
- 現職教員が学校に勤務しながら教職大学院において学びを積み重ねることができるよう、県内大学と連携したサテライト教室についても検討する必要がある。

(5) その他

(教職大学院修了者に対する教員採用に当たっての特例措置)

- 教育委員会によっては、教職大学院修了者について、教員採用にあたって特例制度を設けているところもある。県教育委員会は、教員の採用や管理職の選考において、教職大学院での履修内容等を踏まえながら、こうした体制づくりについて、検討する必要がある。

(修士課程を修了した者に対する教職大学院への入学に当たっての特例措置)

- 既に修士課程を修了した者や教職大学院の教育実践開発コースで専門職学位を取得した者が、再度、学校経営コースで学ぶことができるような仕組みについても検討する必要がある。

3 山口大学教育学部に設置される教職大学院の概要（平成26年度文科省申請）

(1) 教育の方法と理念

現場でのOJTと大学でのOff-JTの融合状態による自己発展(On the Job Development(OJD))によって、教員のみならず、学校現場が地域とともにスパイラル的に成長することを教育の方法と理念とする。

(2) 課程の概要

- 学位：教職修士(専門職) ○修業年限：2年 ○入学定員：14名(予定)
- コース：学校経営コース(現職教員対象)、教育実践開発コース
- 教員組織：14名
- コースの概要

[学校経営コース] 学校経営専門職や教育行政専門職を担い得る人材を養成する現職教員を対象としたマネジメントリーダーの養成コース。

[教育実践開発コース] 即戦力として活躍できる高度な授業実践力と展開力を持ち新しい学校づくりの担い手となる新人教員の養成コース。

(3) 教育課程の概要

ア 編成上の基本方針

OJD(On the Job Development)による学校現場の課題解決プロジェクト型研究をとおして、学校及び地域の教育諸課題に関する理論的・実践的に高度な専門能力を有し、学校現場における指導的役割を担い得る人材を養成。山口県教育委員会や各市町教育委員会と密接に連携・協力し、地域の学校課題に即した学校改善・授業改善に資する構想力・実践力を育成することとし、以下の基本方針により教育課程を編成。

- ① OJDによる学校現場の課題解決プロジェクト研究を核として教育課程を編成
学校現場を学びのフィールドとし、課題の克服、解決に向け、大学院教員等と協働して長期実践研究。
- ② デマンドサイドのニーズに応える授業科目の開設や配置
山口県内の学校や地域が抱える教育的諸課題、山口県教育が有する先進的・革新的取組等を取り扱う授業科目の開設や、行政研修等を積極的に活用する授業を実施。
- ③ 大学院ぐるみでのプロジェクト研究の充実深化
大学院教員(研究者・実務家教員)によるT・T(ティームティーチング)、授業の横断的・合科的運用によるチーム指導等による授業開設。

イ 教育課程の特長

- コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)や「地域協育ネット」等を扱い、院生を先進校に派遣(数日間常駐)し、日常の取組と学校・家庭・地域社会との連動を実践的に学習。
- 山口県教育の実情を踏まえたテーマ研究を行う科目を開設。山口県教育委員会の教育重点課題等をもとに、学力向上、人間関係づくり、校種間連携、へき地・複式教育等の内容について、山口県教育委員会開発教材等も利活用しながら実践的に研究。山口県教育の現代的課題に焦点をあてた実践的な研修プログラムや研究行事を授業機会として積極的に活用・提供。

ウ 教育実習総合科目の特長

プロジェクト研究や教育実習等の実施にあたり、4種類の連携協力校を設定し、大学院(大学)、教育委員会とこれら4種類の連携協力校を効果的にリンクさせカリキュラムを充実深化させる。

「学校課題研究校Ⅰ」：「学校経営コース」院生の現任校

「学校課題研究校Ⅱ」：「教育実践開発コース」院生が教育実習を行う山口市内の学校

「先進的課題研究校」：大学教員等から日常的に指導助言が受けられる学部附属学校

「教育実践協力校」：授業研究、学校課題探求やコミュニティ・スクール等先進研究の場となる公立学校

4 教職大学院に期待すること、今後の検討事項等(平成26年度)

- 教職大学院制度の成功の可否は、大学と県教委との間に、どれだけ信頼関係ができあがっているにかかっている。教育委員会と協働して設置する気持ちで取り組む必要がある。
- 学びの場を学校現場とすることにより、実態に即した研究、学校運営の改善、他の教職員の研修の機会、大学の研究活動の充実などが期待できる。
- 学校課題の解決を図るプロジェクト研究では、学校独自の課題に加え、市町教委の研修課題も重視し市町全体を見渡した課題解決が求められるため、課題設定の段階から派遣元の市町教委等と連携し、意向を踏まえる必要がある。
- 本県教育に貢献する優れた教員を養成するためにも、県内の他大学の学部を卒業した学生が山口大学の教職大学院へ進み、実践的指導力を身につけられるような仕組みが必要である。
- やまぐち総合教育支援センターの研修の活用や互いの人材の活用、研究成果のセンターでの発表など、センターとの連携を一層推進することが重要である。
- 教職大学院の計画が確定した時点で、市町教委や教職員など学校関係者への情報提供が必要である。

(1) 教育委員会との連携について

- 教職大学院制度の成功の可否は、大学と県教委との間に、どれだけ信頼関係ができあがっているかにかかっている。平成28年度の開設に向け、さらに連携を深め取組を進めていく必要がある。
- 教職大学院は、デマンドサイドの要求を反映したカリキュラムになっているので、大学が設置するというよりも、教育委員会と協働で設置するという気持ちを持って取り組む必要がある。

(2) 山口県の実情に応じた教職大学院の在り方（山口大学の構想）について

(拠点校方式)

- 学びの場を学校現場とすることにより、実態に即した研究、学校運営の改善、他の教職員の研修の機会、大学の研究活動の充実などが期待できる。
- 教職大学院の学校経営コース派遣する教職員は学校運営の中核となっている教員であり、学校現場から離れた派遣による研修ではなく、学校現場に勤務しながら新たな学びを積み重ねるといふ点で、学校現場の課題に応じた効果的な取組が期待できるが、一方で、派遣する本人、また、学校の負担も増すこととなる。派遣する学校には非常勤または定数による加配措置があるとよい。
- 学校の勤務と大学院での学びのサービス上の整理が必要である。
- 教育実践協力校の設定は、他の大学にない新しい取組である。地域を巻き込む新しい形での教職大学院であり、この成果が上手くいけば他の大学にも波及されるのではないか。

(学校の課題解決型プロジェクト)

- プロジェクト研究では、学校独自の課題に加え、市町教委の研修課題も重視し市町全体を見渡した課題解決が求められるため、課題設定の段階から派遣元の市町教委等と連携し、意向を踏まえる必要がある。
- 大学院で設定する課題は、市町教委、学校、校長、院生本人のずれが生じないように十分な協議をして設定していくことが重要である。
- 派遣される現職教員の資質能力向上と、現任校の学校課題の解決を両立させるためには、現任校の校長の役割が非常に重要である。
- 課題の設定等に関して、宇都宮大学の取組のように、大学院、教育委員会と地域をコーディネートしていく力も必要である。
- 学校現場を学びの中心とする取組が、学校改革につながり、子ども達のためになることを実感できることで、現場の協力を得ることができる。”全ては子ども達のため

に”ということが共有できれば、現場の教員がもつであろう壁を取り除くことができるのではないか。

- 山口県らしい教職大学院とは、まちづくりと連携した課題の解決に取り組むことであるとの基本認識をもって取り組みたい。

(教育課程のプログラム化)

- 危機管理、学校評価、地域連携等必要不可欠な内容や本県特有の経営課題（コミュニティ・スクールや地域協育ネット等）に関する科目については、選択科目ではなくプログラム化（必修科目）とすることが必要である。

(学部卒院生と現職教員院生の関係)

- 学部卒の院生には、現職教員の院生がメンターとして関わるなどのサポートが必要であるが、現職の院生に過度の負担とならないような配慮も必要である。また、学部卒の院生も新しい感覚、素晴らしい力を持っており、互いに学び合うという意識を持たせることが必要である。
- メンターとなる教員の役割は大きい。山口県には教育力向上指導員や優秀教員など教師力の高い教員が多くいるので、学校の選定や人選の際には考慮が必要である。

(学部卒生の教育実践開発コースへの入学について)

- 県内の他大学は、中学校、高等学校の教員養成を行う学部が多く、小学校免許を持たない学生も山口大学教職大学院に入学して小学校免許が取れるようなシステムの検討が必要である。
- 学校現場では、実践的指導力を身につけた即戦力となる教員が求められている。優れた教員を養成するためにも、県内大学の学部を卒業した学生が教職大学院へ進み、実践的指導力を身につけられるような特別枠の設置が必要である。

(3) 山口大学と他大学との連携について

- 大学教員の得意分野と大学の強みを生かした講義の相互乗り入れによる連携を進めることで、県全体の教員養成のレベルアップを図る必要がある。
- 他大学から、山口大学の教職大学院の兼担教員として授業を担当したり、山口大学まで行かなくても他大学で学べるようなサテライト教室を開催したりすることを検討していく必要がある。

(4) やまぐち総合教育支援センターとの連携について

(やまぐち総合教育支援センターを連携協力校とする取組)

- 福井大学では、教育研修センターを連携協力校と位置付け、指導主事を教職大学院に派遣することで、指導主事が企画・実施する研修の内容に大学教員が関わり、セン

ターでの現職教員の研修と大学との学びの一体化を図る取組を行っている。こうした取組の検討も必要である。

(積極的な情報提供による研究成果の普及)

- 学校現場の課題解決プロジェクト研究とその成果については、市町教委や県内学校への積極的な情報提供が求められる。センターの教育フォーラムで研究成果を発表するなど、広く県内の教員が研究内容に触れる機会が必要である。

(院生のセンター研修への参加)

- やまぐち総合教育支援センターが実施する研修にストレートマスターが自由に参加できるようにし、それを単位化することについての検討が必要である。

(互いの人材の活用)

- やまぐち総合教育支援センターと教職大学院の相互の協同研究や研修機能の充実を図るためには、連携を深め、互いの人材を活用する必要がある。

(5) その他

(教職大学院の設置の取組の情報提供・アピール)

- シンポジウムにより教職大学院の取組の方向性がよく理解できた。教職大学院の詳細な計画が確定した時点で、市町教委や教職員など学校関係者を対象とした説明会の開催など、引き続き情報提供が必要である。
- 他の教職大学院にはない山口県らしい教職大学院の特色を明確にして、積極的にアピールしていくことが必要である。

(山口大学教員の意識改革)

- 山口大学の今後の教育学部や教職大学院については、相当の危機意識を持たないといけない。福井大学の「学習する組織」の視点は、もっと理解して内容にとりこんでいく必要があるし、何より大学の教員組織自体が「学習する組織」になる必要があるのではないか。

VIII 平成26年度取組状況

○教員をめざす学生のための学校体験制度の実施状況	……75
○山口県教師力向上プログラムの実施状況	……76
○採用前教職インターンシップの実施状況	……85
○学校の教員養成力の向上を図る研修会の実施状況	……91
○スクールリーダー研修講座の実施状況	……93

教員をめざす学生のための学校体験制度の実施状況

1 趣旨

教員を志望する学生が、実際に児童生徒とふれあったり、教員の仕事に接したりする体験を通して、教員という職業の魅力を実感し、学校で行われる教育活動全般に関する理解を深めるとともに、体験を通して、教育に対する使命感や情熱、児童生徒を理解する力を身につける。

2 事業内容

- 概要： 県教委が指定する学校で、5日程度学校を訪問し、学習活動、学校行事、その他の学校教育活動における、教員の業務の補助を行う。
- 対象者： 大学または短期大学に在学している教員志望者
(大学1・2年生、短期大学は1年生)
- 実施時期及び期間： 平成26年8月28日(木)～9月26日(金) (1週間以内)
- 参加者数： 計95人 (男性25人、女性70人)
- 実施校及び実施校別参加者数等



小学校(50人)				中学校(18人)				高等学校(25人)	
岩国市立麻里布小学校	1	山口市立上郷小学校	2	岩国市立東中学校	1	防府市立桑山中学校	1	岩国総合高等学校	1
柳井市立柳井小学校	2	山口市立大内南小学校	1	柳井市立柳井中学校	1	防府市立大道中学校	1	山口農業高等学校	4
下松市立下松小学校	4	防府市立佐波小学校	4	下松市立下松中学校	1	宇部市立神原中学校	3	防府高等学校	6
光市立島田小学校	4	防府市立大道小学校	4	光市立島田中学校	1	山陽小野田市立高千帆中学校	1	防府商工高等学校	8
周南市立福川小学校	2	宇部市立上宇部小学校	2	周南市立福川中学校	1	下関市立勝山中学校	1	下関西高等学校	5
山口市立湯田小学校	6	山陽小野田市立高千帆小学校	2	山口市立湯田中学校	3	下関市立長成中学校	1	萩高等学校	1
山口市立良城小学校	2	下関市立勝山小学校	4	山口市立平川中学校	1	萩市立萩西中学校	1		
山口市立大歳小学校	3	下関市立長府小学校	3					特別支援学校(2人)	
山口市立平川小学校	3	萩市立明倫小学校	1					山口総合支援学校	2

○参加学生所属大学別人数

山口大学	37	宇部フロンティア大学	9	広島大学	4	九州大学	1	西南女学院大学	1
山口県立大学	10	山口県立農業大学校	1	安田女子大学	1	福岡大学	2	関西大学	1
下関市立大学	1	島根大学	1	広島文教女子大学	4	九州産業大学	1	学習院大学	1
徳山大学	3	岡山大学	1	比治山大学	1	久留米工業大学	1	日本体育大学	1
山口学芸大学	13								

○教育実践内容

【小学校】

授業参観(ALTとの外国語活動、中学校教諭との小中連携授業等も含む)、学習活動や採点の補助、学級事務の補助(教具作り、提出物の確認、掲示物の貼付、日記のコメント書き等)、特別支援学級の補助、養護教諭の仕事見学・保健業務の補助(診断票等の整理、救護処置)、日本語指導の補助、朝読書の指導、朝の会・帰りの会の話、給食準備、清掃活動、委員会活動、クラブ活動、校外学習への参加・補助、休み時間の児童とのふれあい、自身の小学生時代の様子や様々な体験談を児童の前で話す、始業式にて全校児童の前での挨拶、運動会練習の補助(演技見本、組体操補助、各種目の補助 など)及び運動会当日の係活動、「学校保健安全委員会」への参加、職員研修への参加(道徳の教材研究および指導案検討会、学力向上推進リーダーによるミニ研修会等)、担任や他の教員との情報交換(指導や質疑応答等)

【中学校】

授業参観及び授業における生徒支援、学習相談補助、テスト監督補助、クラス担任補助(提出物の点検、朝の会・帰りの会の指導補助、朝読書観察等)、別室当校生徒とのふれあい、特別支援学級との交流、給食指導、清掃指導補助、保健室で生徒の疾病やケガへの対応の様子などの見学・補助、体育祭の学年練習、全校練習、応援合戦等の生徒支援、ダンス指導の補助、体育祭の準備(草抜き、放送原稿の入力、テントの組立て・設置、体育祭当日に職員競技への参加、吹奏楽部の指導、部活動の生徒支援、学校経営の概要、生徒の状況について(校長指導)、教科授業の講話、職員朝礼参加、あいさつ運動参加)

【高等学校】

オリエンテーション、専攻教科の複数の教員の授業参観、指導補助、朝学習プリント採点業務補助、課題点検業務補助、授業補助教材プリント作成体験(数式入力等)、総合的な学習の時間の補助、LHRでの意見交換、体験談講話、朝SHRの指導補助や清掃指導、朝読書の見回り、図書室で蔵書管理作業(データベース化)補助、教員室での諸業務参観、時間割変更連絡掲示作成補助、部活動参観、文化祭準備、文化祭当日企画運営の補助片付け、中学生一日体験入学において体験学習講座に参加、学校行事(総合スポーツ大会)運営補助、体育大会の準備、運営、片付けの補助、応援練習の指導補助(健康観察及び監督体験)、定時制の生徒による生活体験発表の参観、校長講話、全日制教頭、定時制教頭による講話、農場見学

3 事業成果

- 学校現場での児童生徒とのふれあいや教員との関わりを通して、教員になりたいという意欲が高まった、大学の講義では学ぶことができない実際の学校現場や児童生徒の様子、また先生方の生の声を聞くことができ、大変有意義な時間を過ごすことができた、教員の様々な業務に関わる体験を通して、教員をめざす上で、身につけなければならない資質能力に気付く機会となったという感想が寄せられるなど、多大な成果や効果が報告されている。
- 学校にとっては、児童生徒や教職員が、実施学生の意欲や活動に刺激を受け、学校の活性化につながっている。また、短い期間ではあるが戦力にもなっている。

4 事業成果を踏まえた今後の方向性 (拡充)

- 平成27年度「総合的な教師力向上のための調査研究事業」に申請し、県内の全ての学校で教員志望学生を受入が可能な制度へと拡充する。
- 学校体験制度を「山口県教師力向上プログラム(教師塾)」のエントリー資格としており、学校体験制度に参加していれば、「山口県教師力向上プログラム」に、より望ましい態度で参加することやより広く深い内容の研修を受けることが期待できることから、学校における教育実践内容の共有、学生への指導の充実を図る。

山口県教師力向上プログラムの実施状況

1 趣旨

学校体験や教育実習等、学校現場での体験・実践の積み重ねを通して、児童生徒を理解し、惹きつける豊かな人間性や確かな学力の育成を図る授業力や生徒指導に関する力などの実践的指導力を育成する山口県独自の「教師塾」の仕組みを構築し、これまでの、数日間で行ってきた選考試験とは別に、教師塾での教育実践の状況や大学での学習状況等を志望理由書、面接、小論文、教育実践に関するレポートなどを通して、出願者の意欲や人物、実践的指導力、適性等について、長期的かつ多面的に評価し採用する制度を構築するとともに、養成と採用における評価尺度の共有、大学と教育委員会の求める資質能力の共有を図る。

2 事業内容

○概要：教育に対する使命感や情熱を有し、本県の教員を強く志す者に対して、優れた指導力を有する山口県の教員の教育実践について学び、大学で身につけた専門的知識の具現化を図る機会を提供することにより、子どもたちの確かな学力の育成を図る授業力や生徒指導に関する力などの実践的指導力を養い、将来の山口県教育を担う人材を育成する。

○対象者：（１）小学校教諭一種免許状課程認定大学（大学院を含む。）に在籍し、平成28年3月に卒業又は修了見込みで、「エントリー資格・推薦基準」に基づき学長又は学部長が推薦する者

（２）教師力向上プログラム（教師力養成講座・教師力養成体験実習（指定教育実習））に全て参加できる者

○エントリー資格・推薦基準：山口県公立小学校の教員を強く志望する者で、次の（１）から（６）までの全てを満たす者

- （１）子どもへの深い教育的愛情をもち、子どもの指導に労を惜しまず取り組み、自らの指導力を向上させていこうとする者
- （２）心身ともに健康であり、学業成績及び人物ともに高く評価できる者
- （３）小学校教諭の普通免許状を有する者又は平成27年度中に取得見込みである者
- （４）平成28年度（平成27年度実施）山口県公立学校教員採用候補者選考試験を受験する者
- （５）山口県の「教員をめざす学生のための学校体験制度」に参加した経験がある者
- （６）地方公務員法第16条及び学校教育法第9条欠格条項により、次のいずれにも該当しない者

○受講者： 27人（志願者45人）

※山口県教師力向上プログラム受講者選考試験（個人面接・小論文・書類審査）実施（平成26年9月21日）

○実施時期及び期間： 平成26年11月8日（土）～平成27年2月28日（土）

○「教師力養成講座」実施内容

- ・学校現場での実践に基づいた特別講義を実施
- ・講師は優れた実践を行っている教育委員会事務局職員等は優れた実践を行っている教育委員会事務局職員等



1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
11月8日(土)	11月22日(土)	12月27日(土)	1月10日(土)	2月28日(土)
<ul style="list-style-type: none"> ・開講式 ・児童生徒理解 ・いじめ、問題行動への対応 ・AFPYの理論と実践 ・心の教育(道徳の時間) 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業づくり ・学級経営 ・人権教育 ・小学校における特別支援教育 ・山口県の教育施策 	<ul style="list-style-type: none"> ・情報セキュリティ、個人情報保護、著作権 ・ICTを活用した教育実践 	<ul style="list-style-type: none"> ・信頼される学校づくり(学校と家庭・地域との連携、コミュニティ・スクール) ・外国語活動 ・国語・理科の模擬授業 	<ul style="list-style-type: none"> ・安心・安全な環境づくりと安全教育 ・(講話)若き教員に期待する ・体験発表会 ・閉講式

○「教師力養成体験実習」実施内容（5市14校で教師力養成体験実習を実施）

- ・学校現場の教員のもと、学校現場で授業、学級活動、行事等教育活動に関する演習を実施
- ・学力向上推進リーダーのもと、学校現場で授業に関する演習を実施

教師力養成体験実習① ・学校体験制度経験者は、期間内に4日以上 ・学校体験制度未経験者は、期間内に6日以上	11月10日(月)～1月23日(金) 4日～10日間実施
教師力養成体験実習②（指定教育実習） ・期間内に6日以上学校で実習を行い、1回以上の授業研究を実施	2月16日(月)～2月27日(金) 6日～10日間実施

○教育実践内容

<p>(1) 授業・学級経営・生徒指導</p> <p>ア) 授業参観・教材準備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初任研、フォローアップ、外国語活動、情緒学級、難聴学級、公開授業等、多学年での授業参観を実施 ・担当教諭のクラスや、1年の生活科等の教材準備を共に実施 <p>イ) 個別の配慮を要する児童への支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全体を見取り、参観をしながらの臨機応変の補助 ・配慮を要する児童を担当しての補助…図工のカッターを用いた学習での支援等 <p>ウ) ノートやプリントのチェック、採点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計算、漢字、やまぐち学習支援プログラム問題等を実施 <p>エ) 授業実践・学級活動(指導)の補助</p> <ul style="list-style-type: none"> ・担任出張時等の指導(隣接学級の担任の指導を仰ぎながら) ・昔の遊び交流会の遊びコーナーの担当、指導 	<p>オ) 給食指導・掃除指導の補助</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食物アレルギー対応学級での給食指導補助体験(アナフィラキシー対応を体験) <p>(2) 教育活動全般</p> <p>ア) 登校時・下校時の挨拶指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校長や生徒指導担当教諭と共に正門と裏門で実施 <p>イ) 児童を迎えるメッセージの板書等、早朝の教室巡り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝、児童を迎える教室の学級による雰囲気の違いを実感 <p>ウ) 保護者対応、保護者・地域との交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・怪我をした児童及び保護者への連絡、事後措置等の一連の対応を傍で観察 ・全校縦割り班ウォークラリーのチェックポイント担当を保護者と共に実施 ・地域開放参観日、PTA主催のバザールへの参加
<p>(3) 教員の仕事全般</p> <p>ア) 校内研修への参加</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タブレットを活用した公開授業等の参観、研究協議への参加 ・校内研修研究協議後、対象学生への研修会実施(実習の成果と課題の情報交流、校長・教務主任による受指導) <p>イ) 若手自主研修への参加</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若手教員中心に取組状況を交流しながら、学びたいことを共有し先輩に教えを請う ・若手教員に話を聞く機会づくり(帰りの会後の片付けの手伝い等) ・学級会計の手順を紹介 ・出張命令簿や休暇簿の存在や事務主査との連絡相談の仕方を紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・各校務分掌の実施計画や校内研修資料、初任研資料等を随時付し動き方を紹介 <p>ウ) 職員会議(含終礼)・同学年・分掌部会への参加</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校行事実施計画案の検討等、職員会議の参観 ・期末懇談会へ向けての同学年の資料検討や準備の補助 <p>エ) 委員会活動への参加</p> <ul style="list-style-type: none"> ・委員会の集会へむけてのリハーサル指導、委員会活動の補助等 <p>オ) 学校行事の準備・実施の際の補助</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内持久走記録会の試走、準備・補助・後片付け ・校内音楽会の補助、後片付け <p>カ) その他</p>

3 事業成果

- 講義の内容が現場経験を交えながらの話で勉強になり学ぶことへの意欲が湧いた、講義＋演習スタイルで実感をもって理解できた、これまで体験することができないような授業ばかりで、もっと様々な授業を受けたいと思った、本プログラムで学んでいることの多くは、目の前のことを理屈で処理するのではなく、受け継がれてきたものを次世代に渡すという、とても尊いものであると感じたといった感想が寄せられ、学ぶ意欲の高い集団が形成されることで、質の高い学びが展開され、受講した学生の学ぶ意欲がより一層高まっている。
- 市教委・実施校からは、児童が年齢の近い学生とかかわることで学校生活を楽しんだり、児童の中にあこがれ（目標）の感情が芽生え、キャリア教育の視点からも有効、学校にとっても、教職員が学生の一生懸命さに刺激を受けたり、学校全体の雰囲気がよくなったりと、活性化につながっている。また、体験実習を引き受けることで、教職員の人材育成の機会となる、などの意見が寄せられるなど多大な成果や効果が報告されている。
- また、実施校からは、体験実習を通して学生が授業も含めて、落ち着いてゆとりを持って児童と関われるようになった、学校現場についての知識や教師の仕事内容が、より深く実践的な内容として理解できた、授業や生徒指導に関する力も身に付き、自信につながっている、などの成果が報告されている。
- 学生からは、学校の主役は子どもたちであり、その子どもたちが生き生きと学校生活を送っていくために、信頼関係を築いていかなければならないこと、児童を思いながらの授業はとても楽しいということ、「児童と一緒に創りたい。」その想いのある授業は児童にも、自分にも、よい授業になると体感した、子どもとのかかわり、学級経営、教師の様々な仕事、会議や研修など大学では学べない多くのことを学ぶことができたなどの感想が寄せられた。
- 本プログラムでは、「教師力養成講座」で学んだことを「教師力養成体験実習」や「指定教育実習」の学校で生かす、また、「教師力養成体験実習」で感じた課題について「教師力養成講座」で学び、仲間と話し合いなどにより、その解決に努める、こうした繰り返しにより学生の資質能力が高められている。

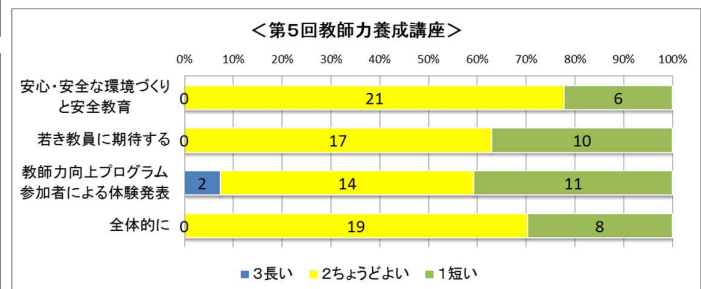
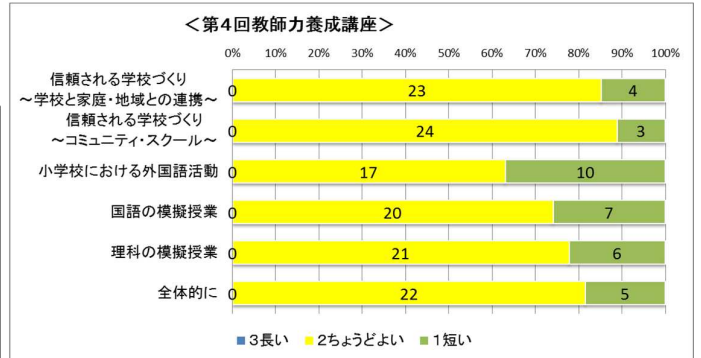
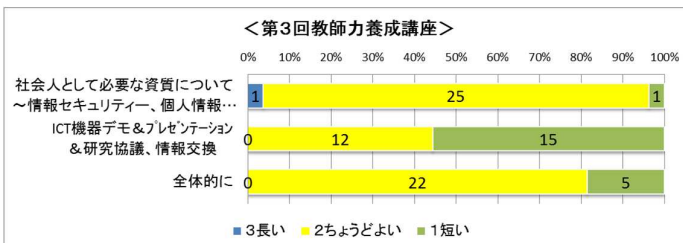
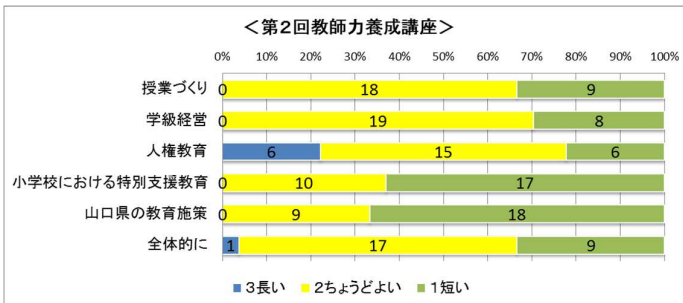
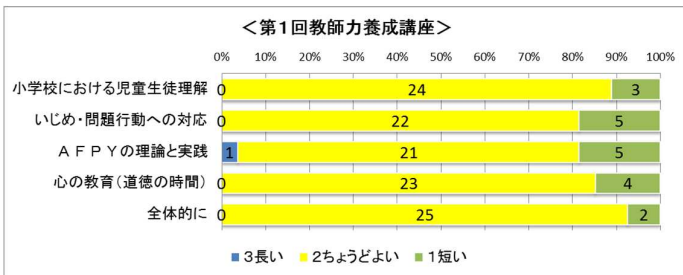
4 事業成果を踏まえた今後の方向性 (拡充)

- 平成27年度「総合的な教師力向上のための調査研究事業」に申請し、「山口県の教師塾」の主要事業として位置付け、平成26年度の実施の成果・課題を踏まえながら、教師力向上プログラムの実施期間の拡大や受講者数、実施校種の拡大、プログラムの改善・充実について研究を行う。
- また、教育委員会・学校が実施する教師力向上プログラムの取組に大学教員も参加することで、教員志望者に身に付けさせる資質能力について共有を図るとともに、教師力養成講座や教師力体験実習の取組における指導内容や指導状況について共通理解を図り、教育委員会・学校と大学での指導が有機的につながることで、大学の学びと学校現場での実践が結びつけられるような指導体制を構築する。
- 合わせて、教師力向上プログラム修了者特別選考の実施や教員志望者が学ぶべき内容や到達目標を示したハンドブックの作成することで、学校や大学における指導内容や指導水準を統一するとともに、教員志望者が主体的に学べる仕組みを構築する。



■教師力向上プログラム(教師力養成講座)アンケート結果(受講者)

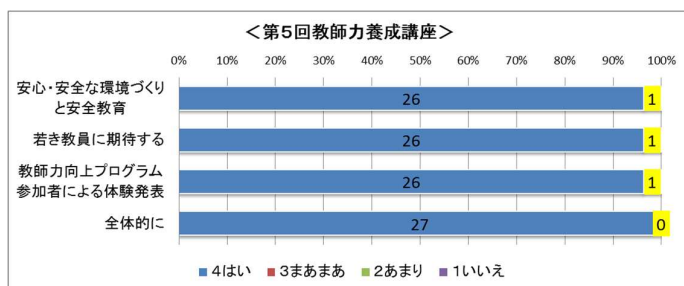
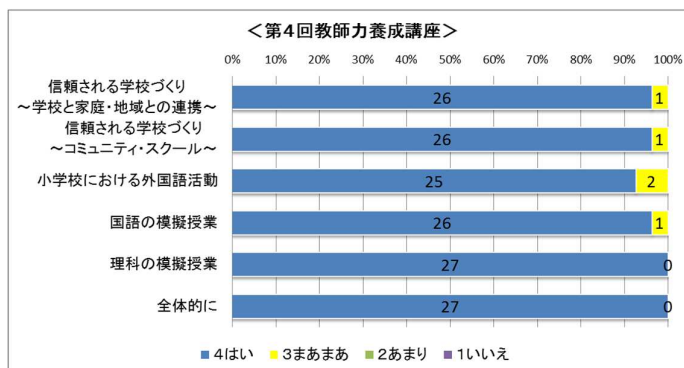
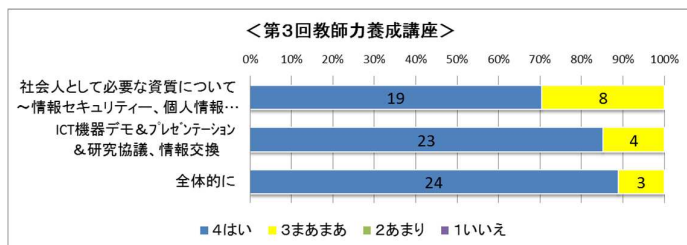
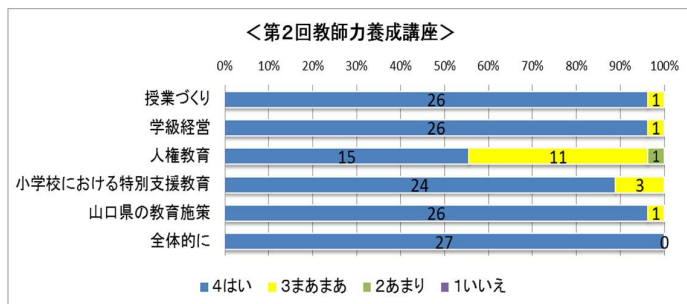
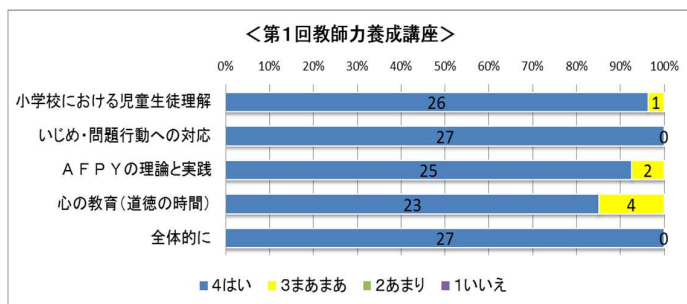
1 各内容の時間配分は適当でしたか。



■教師力向上プログラム(教師力養成講座)アンケート結果(受講者)



2 この研修はあなたにとって役立ちましたか。



■教師力向上プログラム(教師力養成講座)アンケート結果 (受講者)

3 アンケートにおける主な意見

【第1回教師力養成講座】

■講義「小学校における児童生徒理解」から学んだこと

- いじめの問題だけでなく、日々の出来事等においても、保護者との信頼関係を築くこと、そのために担任の判断のみで行動せず、教頭等管理職をはじめ学年主任、生徒指導主任らに報告、相談を行い情報を共有することの大切さを学んだ。
- 自己指導能力を育てる「ま・ほ・う」まかせる、ほめる、うけとめる、の三つが大切だと言うことが分かりました。生徒指導は全ての子どもに、全ての教育活動を通じてするものだと分かりました。

■講義「いじめ・問題行動への対応」から学んだこと

- 問題行動が起き、事後指導を行うだけでなく、これからのことについて開発的に生徒指導を行うことが大切であること。そのために子どもたちが発するサインをしっかり見ることが必要である。また、問題行動の背景を考えることと、自己指導力を育むこと。
- いじめを発見するには、子どもたちと多くふれ合い信頼関係を築いておくことが大事だと痛感した。表面で判断するのではなく、関係性が深まることでみえてくる部分もあるので、しっかり児童と関わっていくことが大切であることが分かった。

■講義・演習「AFPYの理論と実践」から学んだこと

- AFPYは、絆をつくるためにとっても有効な手段だということを知ることができました。しかし、AFPYは使い方次第では逆に人間関係を崩してしまうということを知ったので使うタイミングについて、また、学んでいかなければいけないと思いました。
- お互いの気持ちや気分、状態を可視化することで、気づかいが生まれ、温かい雰囲気になる。活動は楽しい気持ちを引き出す、関わる人達の状況、状態を踏まえて内容を選ぶ必要があること。言葉ひとつでやる事が人によって違って来ること。

■講義「心の教育(道徳の時間)」から学んだこと

- 道徳的心情・判断・態度までを「道徳の時間」で培う。道徳的行為や習慣は学級活動等で培う。道徳の時間で学んだことに、即効性を求めないこと、だからこそ学習計画を大切に、学びを積み上げて力をつける必要があること。
- 今まで道徳教育と心の教育の違いを考えた事がなかった。しかし、今日の講座で、心の教育とは主に豊かな人間性のことであり、道徳教育とはすべての教科において指導していくものだという事を知った。また、教師は即効性を求めているが、「徐々に」が大切なのだということも学べた。

【第2回教師力養成講座】

■講義「授業づくり」から学んだこと

- ねらいをもち、手立ても考え、その意義も子供に伝わる授業をしていく大切さがわかった。また自分は教師が～して子どもを～させるという視点からの考えが多かったが、子ども側の視点を常に持つ大切さも学んだ。教員として必要な表情、声、話し方などの話も聞いて良かった。
- 良い授業とは、受ける側に親切な授業であること、そのために、声や表情、言葉づかいに気をつけることや、シンプルな理解のための教材研究、子ども保護者や地域の方々による評価があることを学んだ。

■教師力向上プログラム(教師力養成講座)アンケート結果(受講者)

【第2回教師力養成講座】

■講義「学級経営」から学んだこと

- 学校の基本方針の下、6年間で学級経営をつないで育てていくことが大切。一貫したブレない思いが信頼関係を生むと感じた。
- 自分の中でどんな学級になってほしいかを確かなものしておくこと。そして、そのための指導は一貫したものでなければならぬ。考えながら学級経営をすることが大切。
- 学級活動には集団決定と自己決定があり、その議題によってどちらが適切であるか考えることが大切であると学んだ。

■講義「人権教育」から学んだこと

- 人権は「わたし」が持っているだけでなく、「すべての人」が持っているという意識が大切であり、だからこそ「他人の人権・人格」が尊重されることが重要、多くの課題があり、配慮が必要なことを学んだ。
- 人権は全ての人を持っているということを考えたうえで行動することが大切だと分かりました。人との関わりを通して人権を学び、自分だけではなく、他人を大切にしながら過ごしていきたいと思いました。じゅう・びょうどう・いのちの3つのキーワードをしっかりと覚えておきたいです。

■講義「小学校における特別支援教育」から学んだこと

- 何か問題があっても、子どもではなく自分の指導をふり返り、自分を高めることにつなげていき、又、子ども理解を深めていく大切さと改めて感じました。特別支援のイメージが変わり、もつべき視点も少し幅がふえ知識になりました。
- どんな子にも分かりやすいようにすることが、結果的に支援になってゆく。授業のユニバーサルデザイン化が大切となる。そのためのヒントや具体的な活動、指示は考えていかななくてはならない。

■講義「山口県の教育施策」から学んだこと

- 国はもちろんのこと、自分自身が働くことになる山口県の教育について、常にアンテナを張り、子ども達の指導・支援につなげていく必要があると学んだ。
- 現在地を知り、目的地を明確に定めて進んでいくことが大切。山口県の、「未来を拓くたくましい「やまぐちっ子」」の姿をしっかりと描いて、それに向けた教育ができるようになりたい。

【第3回教師力養成講座】

■指導講話「社会人として必要な資質について～情報セキュリティ、個人情報保護、著作権等の観点から～」から学んだこと

- プライバシーに関して、常に公開・引用・記録されることを意識して利用することを中心に、出会い系サイトによる被害や、事故予防の心構えなどを学んだ。これから、どのように子ども達に伝えたらよいか、という事も考えていきたい。
- “情報資産”として、情報をもっと大切に、そして慎重に扱うようにしたいと思った。出す情報は「玄関の表に貼れるものだけ」という言葉はとてもしっかりきた。学校では、様々なものを活用して教材にすると思うので、著作権についても気を付けたい。

■教師力向上プログラム(教師力養成講座)アンケート結果(受講者)

【第3回教師力養成講座】

■「デモ&プレゼンテーション&研究協議、情報交換」から学んだこと

- 企業の方のお話を伺い、さまざまな機器、アプリ等を知ることができた。どれも魅力的なものばかりであったが、教員としては何のためにその機器、アプリを使っていくのか目的をしっかりと持った上で活用していくことが大切であると思う。
- 情報機器で様々なことができるようになるが、問題は、それをいかに使いこなすか、すなわち、人側のアイディアによるところが大きいことを学んだ。また、こういうプレゼンの場に立ち会うのは初めてだったので、営業の方の話方もためになった。

【第4回教師力養成講座】

■講義・演習「信頼される学校づくり～学校と家庭・地域との連携～」から学んだこと

- 山口県が独自の取組として「地域協育ネット」を実施していること、その内容は現在の教育が抱える課題に対応していることを学べた。学校の取組やそれを積極的に支援し、関わろうとする保護者や地域の姿があり“教育”が大きな組織の中で行われているということを感じた。
- グループワークの熟議では、自分の考えをまとめ、発表し、自分にはない考えを聞き、他者と共に考えをまとめ、プランを考える活動がとて楽しく有意義であった。自分が今後、何かについて考えていく時の参考になった。

■講義・演習「信頼される学校づくり～コミュニティ・スクール～」から学んだこと

- 名前だけが一人で歩いていて、コミュニティ・スクールがどのようなものか、具体的に知らなかったがDVDを見ることで、どのような仕組みになっているのかまで、細かいところを学ぶことができた。中でも地域と学校がつながることで、充実感を覚え、子どもたちが周りに感謝の気持ちをもつことができるということで、地域連携のすばらしさやメリットを改めて感じた。
- 学校に地域が入ってくることにより、学校と地域の双方の学びになるなということを感じました。また、大人が学校を信頼してくださる、きっかけづくりになるなと思いました。

■講義「小学校における外国語活動」から学んだこと

- 外国語活動は、言語を教えるだけでなく、コミュニケーションへの態度をも含めて、身につけさせることから、協同学習の方法も重点的に学ばなければならないと思いました。
- 実践するときの教材・教具をみせていただいて、教具づくりを工夫して、子どもをひきこむ外国語活動をしていきたいなと思いました。自分の特技を生かした授業づくりにも挑戦したいです。

■講義・演習「国語の模擬授業」から学んだこと

- 最初と最後の考え方のちがいを自分でみてとることでこの時間の学びと、それによる自分の変容を感じることができた。そのような学びを実感させる授業づくりに取りこんでいきたい。
- まとめさせるために語句を制限することが、学習内容、特に考え方について多大な影響を与えることを学んだ。語の選択には熟慮が必要である。
- 意図的指名や相互指名など国語以外の授業で必要となるスキルも教えてもらうことができました。

■教師力向上プログラム(教師力養成講座)アンケート結果(受講者)

【第4回教師力養成講座】

■講義・演習「理科の模擬授業」から学んだこと

- 学習問題と学習のまとめをしっかりリンクさせながら、子どもに学びある活動をさせることが大切であることがわかりました。
- “活動ありの学習なし”という言葉にすごく印象に残った。楽しいだけの授業でなくしっかりと学習問題→気づき→考察→まとめの流れのある授業が大切だと思った。
- 「学んだことを活用する」ことを最終到達点にすることこそ、理科の有用性を実感させることではないかと思った。授業で追究する問いと学習内容を意識すること。

【第5回教師力養成講座】

■講義「安心・安全な環境づくりと安全教育」から学んだこと

- 学校の安全は教職員の組織を基本として作られる。そのため、危機意識を高めることが大切である。同時に、子どもたちに安全への意識を身に付けさせることも大切である。安全への真剣さを持ち続けたい。
- いつ、何が起きるか分からないという危険予測を私たちは常に意識しておかなくてはならないということを学んだ。教職員の危機管理で救うことのできる命もあるので、学校は子どもを預かるだけでなく、子どもを守ることができる場所にしなければと思った。

■講話「若き教員に期待する」から学んだこと

- 先生の教職の事務的なシステムチックな部分ではなく、揺れ動く人としての大切な心の部分において、情熱や尊さといった、生命に直結する感情を学びました。私も自分の根本を常に意識していきたいと思います。
- 4つのキーワードをずっと心に残していきたいと思いました。そして、私だからこそその強さとしたいことを心の中にもって、教員になりたいと思いました。心に残る言葉とこれからが楽しみになる、すてきな時間でした。

■報告会「教師力向上プログラム参加者による体験発表」から学んだこと

- 27名が同じ講座を受け、それぞれが学び、その学びを一人ひとりが実習に生かしていました。教師力向上プログラムを通じて、互いが高め合っていると感じました。もっと多くのことを学びたいと思いました。
- すてきな出会いと学びでいっぱいでした。一人ひとりが実習で貴重な体験をし、それを共有して、みんなの学びにできるこのプログラムの良さを感じました。これからも、プログラムメンバーとお互いを高め合いながら、努力していきたいと思います。

■教師力向上プログラムを通しての感想

- 先生方の話の内容が現場経験を交えながらの話で、とても楽しく勉強になり、学ぶことへの意欲が湧きます。講義+演習スタイルで実感をもって理解することができました。
- どの講義も学ぶことが多く、講義の中身だけでなく教師としての話し方のテクニックや指導の小話なども学ぶことができました。講義がとても充実しており、先生方の熱心な思いが伝わってきて自分も頑張ろうと思えました。
- ベタランの先生方の模擬授業は、様々な意図的な工夫やテクニックがあり、体験することのできないような授業ばかりで、もっと様々な授業を受けてみたいと思います。展開の仕方、発問、注意すべき点などが体験的に学ぶことができました。
- 同じ志を持つ仲間と、熱意のある先生方に囲まれて学ぶことができるのはとても楽しいです。1時間1時間の講義・演習が数年後に訪れるであろう教員生活に、つながると思います。

■教師力向上プログラム(教師力養成講座)受講レポート(受講者)

■教師力養成講座を通して学んだこと

- 教職員一人ひとりが、それぞれの持ち味を持たず、画一的な教育であつたら、本当に子どものためになる教育を生み出すことはできないだろう。自分の強みをはっきりと自覚し、自分に足りない部分を補いながら、さらに確固たる自分を築いていきたいと感じた。また、本プログラムで学んでいる多くのものをまとめる根本的な「人間」というものを先生の話から自分が感じたと思った。教育実習をはじめとした子どもとのかかわり、教職での先生自らの経験談は、ただ目の前のことを理屈で処理するのではなく、受け継がれてきたものを次世代に渡す、というとても尊いものであると感じた。だからこそ人材育成なのか、とも納得した。私も、先生と同じような教員になりたいと思うと共に、先生に負けないほどの情熱を持ちたい。
- この教師力養成プログラムで、私は本当に多くのことを学ぶことができた。講義で得た知識や考え方は、必ず私がこれから生きていくうえで役に立つであろうし、実習で経験したことは、私の教員としての土台になるのだと思う。なにより、このプログラムからは教育委員会の先生方からの、若い教員に期待するエネルギーを感じた。このエネルギーを吸収して、このプログラムで学んだ事を活かし、これから山口県の子どものしっかりと育てることが出来るよう、一生懸命頑張りたいと考える。
- プログラムを通して自分が持つべき責任について、学校現場より学ぶことができました。自分の弱さに負けない、一人の教師としての責任を学びました。どうしても山口県の教師になりたいと願っている私にとって、教師塾を受けられると決まった時の喜びは、今でも忘れることはできません。教師塾を通して教師としての資質だけでなく、多くの実力を持った先生との出会いもあり、より山口県の教育への興味が深まったと感じています。私の今の目標は、子どもたちのためにわくわくする授業づくりをすること。子どもたちが真似したくなる人になること。そして、これまで実習でお世話になった先生方に「あの先生は私が教えた」と胸を張って言ってもらえるような教師になることです。
- 第5回目の講座を通して、改めて受講者の仲間やプログラムを支えてくださった方々、学校現場の先生方とのつながりを実感した。この人と人とのつながりこそが、教育だけでなく、人が生きる上で、大切なものであると、プログラム全体を通して、本心から思うことができた。今後は、本プログラムで得た学びを全て自分のものとして、生かしていきたいと思う。
- これまで5回の講座とⅠ期Ⅱ期の教師力養成体験実習を行ってきたが27人全員が教師力向上プログラムを受ける前よりも「教師になりたいという情熱」がさらに強いものとなったと報告会で感じた。私自身も今日まで、26人と共に学ぶ中で新しく学ぶことや知ることの楽しさを改めて感じ、教員になって実践したいことや挑戦したいことがこれまでも増して大きくなった。これから教員になるために、そしてなってからも多くのことを知り、学ぶと思う。その学びを一つずつ児童の明るい未来の支えとして使うことができるよう、ずっと成長していきたい。
- この教師力向上プログラムに参加して実践的指導力は参加する前より向上できたし考えかたも、ものすごく広げることができたと思う。でもこの教師力向上プログラムを通してここまで高め合える26名の仲間と出会え、これからも切磋琢磨し合えることがとてもうれしい。一緒に別の研修会に参加したり、一緒に勉強もした。ここまでの関係を築くことができたことに感謝したい。大学は違うが同じ志を持つもの同士、たくさん時間のある学生だからこそいろんな研修会等に参加してこれからも学び続ける姿勢を持ち続けたいと思う。

■教師力向上プログラム(教師力養成体験実習)アンケート結果 (市教委)

1 山口県教師力向上プログラム(教師力養成体験実習)の実施について

- 採用試験を受験する1年前の学生にとっては、学校での体験実習を通して学校の状況把握や児童理解ができる絶好の機会であるとともに、5回の養成講座を通して担当課指導主事等から山口県教育の方向性や教師として必要な資質能力等を学ぶ貴重な経験ができたと思う。また、体験実習②において、授業研究を経験できたことも意義深い。
- 学校にとっても、教職員が学生の一生懸命さに刺激を受けたり、児童が自分の年齢に近い学生と接することで学校生活を楽しんだり、活性化につながっている。また、体験実習を引き受けることで、教職員の人材育成の機会となる。
- 実践的な実習を行うことは、教職への意欲を高めるとともに指導力の一層の向上が期待できる。
- 通常の教育実習と比較すると、このプログラムでは、選抜された意欲ある学生が来るので学校も積極的に学生を育てようとする姿勢が育つ。そのことを通じて、実習生だけではなく学校の教職員の資質向上が図れることを期待している。
- 教師へなろうとする意識もより強まり、よい制度であると思います。

2 制度実施のスケジュールについて

- 選抜試験結果の通知から、実施校決定の回答までの期間がもう少しあるとよい。そのためには、受講者選抜試験を本年度より早めに実施してはどうでしょう。(採用試験との兼ね合いがあるので難しいとは思いますが)
- 市教委からの実施校への支援が難しかったので、実施計画書等を実施校から市教委経由で提出するようにしていただくと助かります。
- 今回は1名の受け入れだったのでこのスケジュールでも対応できましたが、人数が増えた場合は、日程的な余裕が必要と感じました。
- インターンシップは採用試験合格者が該当者なので、試験結果発表後からのスタートはやむを得ないが、この教師力向上プログラムの方は、もう少し早めのスタートでも良いと考える。ただし、学生は、通常の教育実習もあるので、時期的な改善は難しいであろう。

3 本制度を実施する上での課題について

- 公共機関の利用を原則とすると、大学の授業(講義)との兼ね合いから、大学から遠方の学校への協力依頼は難しい。そうすると、本年度、引き受けた受講者人数程度がよい。
そこで、受け入れ校を拡大するために、私用自動車(自己責任として)の利用にはなるが、すでに学生ボランティアを行っている学校で本プログラムを実施できるとよい。(人間関係や日程調整において円滑に実施できるメリットがある。)
- 本制度の全体的な周知ならびに、実施校の校長等に対する活動内容の周知
- 本制度は、学生だけでなく教員自身の指導力アップにつながることから、学生、教員ともに制度について一層の周知を図り、継続して人材を育成していくことができる仕組みとして定着していくことが必要だと感じました。
- 教師力向上プログラムの実習と、通常の教育実習と両方行くようになると、大学生にとって、授業のみならず、部活動やサークル活動などとの両立が難しくなる可能性がある。また、今回、学校に2回の評価をお願いしているが、負担軽減を考えると、1回でも良いのではないかと考える。

■教師力向上プログラム(教師力養成体験実習)アンケート結果 (実施校)

1 制度実施のスケジュールについて

- 実施校決定通知が届いてから事前面接日を決め計画書を作成するまでの期間が短すぎる。学校行事や校長や担当が出張等で不在の日を除き、実習生の都合まで考慮すると、事前面接日が期限までに行えない可能性も出てくる。(山口大学の基本実習後を考えてとやむをえないかもしれない。)
- 体験実習①と②の間を設けることで、中間時点の評価が行えることは効果的である。ただし、体験実習②が2週間しかない間に6日以上勤務と授業研究を課しているため、多くの実習生を受け入れている学校には、(本気がかかわろうとするほど)物理的な無理が生じる。
- 実施校および予定者の決定から実施計画の作成までの期間が、短かった。本校のように5人の事前面接することを考えると、もう少し時間がほしい。
- 実習②については、もっと早い時期の方がよい。できれば1月末～2月初旬には終わらせられるとよい。
- 体験実習②については、実質10日間の中で6日を選択することは、年度末でもあるとともに、学生の授業等の関係から、たいへん困難であった。来年度は、実施校への通知、事前面接の実施・計画書の作成も含め、余裕のあるスケジュールをお願いしたい。
- スケジュール全体を考えると難しいかもしれないが、教師力養成体験実習②は年度末の多忙な時期になるので、実施期日が早まるとよい。
- 実施校決定の依頼を早く(2週間ほど)して欲しい。決定から計画書の作成、実施までにゆとりがない。
- 教師力養成体験実習②については大学の後期の試験後であり、春休み中であつたので実習生にとって実習しやすいスケジュールであった。教師力養成体験実習①については、大学側が授業を休講することに難色を示していたので、大学内での十分な打合せの必要性を感じた。

2 教師力養成体験実習①実施期間(学校体験制度経験者は4日以上、その他の者は6日以上)について

- 以上とあるので、実習生と受け入れる学校側との都合が合えば期間が増やせるのが、双方に無理がなくてよい。
- 適当と考えますが、本来の学習である大学での講義等やサークル活動もあり、日程の調整が難しく感じました。

3 教師力養成体験実習②(指定教育実習)実施期間(6日以上、授業研究1回以上)について

- 期間や授業研究の回数は以上とあるので、実情に合わせることでできて適当。ただし、体験実習②の期間が2週間に限定されているのが学校・学生双方に負担となっている。
- 学校・学級にやっと慣れたかと思った頃にお別れという感じで、もう少し期間があつてもよかったかなあと、終わってから思いました。
- 業研究は、1回目の反省を生かして、最低でもあと1回行うという面から、授業研究2回以上が適切だと思います。学生も試験が終わり、時間的な余裕があります。多様な経験をさせる意味から、実習①よりももう少し長く経験させたいと思います。本校は10日間実施。

■教師力向上プログラム(教師力養成体験実習)アンケート結果 (実施校)

4 本制度を実施した成果について

■教師力向上プログラム受講者の変容等について

- よく質問し、興味を示して実行しようとする学生が多い。資質の高さを感じる。児童とのかかわり方が、自然になってきている。児童の言動のよさを価値付け学習に活かしたり、寄り添って個別の対応をしたり、実習生それぞれの持ち味がみられるようになってきた。
- 日頃、本校にボランティアで来てくれている学生3名を受け入れたので、児童とのかかわりもスムーズで熱心に取り組んでいた。授業研究を通して得たことが多かったように思う。補助ではいるのと授業者として児童の前に立つのとは、明らかに覚悟がちがう。プレッシャーも大きかったと思うが、得るものも多い。教師としての自覚が高まったように思う。
- 実践的指導力を養うことが目的であれば、それに必要なカリキュラムをもう少し具体的に示し実施する必要がある。
- 確かに現プログラムでの時期に研修できれば、授業力や生徒指導に関する力などの実践的指導力は相当身に付けることが可能と考えますし、実習生にとっても自信に繋がると思います。
- 大きな声で挨拶ができるようになった。(対教職員、児童、保護者)社会人として大事と思われる。授業中、進んで自然な形で児童に寄り添い、言葉がかけができるようになった。困ったこと等、進んで教職員に訊き、自信をもって動けるようになった。授業も含めて、落ち着いてゆとりをもって児童と関われるようになった。
- 児童や教職員への挨拶が堂々と、落ち着いてできるようになった。学校現場についての知識や教師の仕事内容が教育実習のときと比べて、より深く実践的な内容として理解できたようである。教師になりたいという夢や希望がより強くなったようである。生徒指導の実践をいろいろな場面において目の当たりにし、そのノウハウが少しでも理解できたようである。
- 実習①、②を同じ学級で実施したことで、児童との人間関係づくりがうまくできた。そのことが授業づくりや児童への指導に生かされ、効果的であった。
- 受講者は、今年度本校において基本実習を実施しており、その際とは違い、今日的な課題(授業力向上・特別支援教育)に特化した研修内容を組むことができた。一層学校の現場について、理解が深まったと思われる。
- 実習①、②とともに連続した6日間で行ったので、日が経つごとに児童とのよりよい人間関係作りができていた。
- 教材研究の方法や授業記録の取り方などを指導していく中で、授業への見方が変わり、細かな授業技術や手立ての工夫に意識が向くようになった。授業研究にも果敢にチャレンジし、課題をより明確にとらえることができるようになった。子どもたちとの関わりにも変化が見られ、コミュニケーションがよく取れるようになった。
- 単位取得の教育実習とは違い、教員としての幅広い仕事内容を体験することができ、本人の自覚が高まったと思います。また、1人での実習であるため、職員室内で教職員と一体となった実習期間を過ごせたことも大きなメリットだったはず。そのため、日常の学習指導や生徒指導の経験も積んでいます。
- 教師力体験実習に選抜され、教師という職業が現実のものとなる中で、本人の体験実習への意欲は高いものがあつた。体験実習①と②では、授業参観以外にも児童支援を積極的に行い、個別の支援のあり方を学んでいた。また、授業研究に向けて、指導担当はもちろん教頭にも積極的に指導助言を求め教材研究を深めた。当日の道徳授業では、道徳的な実践力を培うために、いろいろな手立てを用意して、質も高い授業を展開した。
- 本校の受講者は、大学の教育実習を本校で5～6月、10月に実施しているの、学校や子どもたちの様子ある程度把握している。その上で教師力養成体験実習を実施したので、回を重ねるにつれ、子どもたちへの接し方や言葉かけが上達している。また、体験実習①において、教育活動全般にわたる実習を体験したことで、教師の様々な活動に気づき進んで関わろうとする姿勢が見えるようになった。

■教師力向上プログラム(教師力養成体験実習)アンケート結果 (実施校)

4 本制度を実施した成果について

■教師力向上プログラム受講者を受け入れる学校側の成果

- 学生、教員、児童相互の刺激となっている。個別の配慮を要する児童の支援や校外行事の運営面で、とても役立っている。2分の1成人式をはじめ、いろいろな場面で、年齢の近い実習生とかかわることで、児童の中にあこがれ(目標)の感情が芽生え、キャリア教育の視点からも有効である。
- あえて若手の担任やミドルリーダーの担任に指導を任せたり、人を指導することで本校の教諭たちも自分の学級の学級経営を振り返ったり、授業改善に役立ったりした。
- 本校では、教育実習や山大的チューター等の「若い人材を育てるシステム」の中に位置づけて実施することができた。30代の若手の教員を中心に担当させることで、若手教員の人材育成につながるいい機会となった。
- 若い先生(学生)が、学校に入るだけで学校(学級)は、活気づき、中間時間や昼休みの時間は、子どもたちの歓声で包まれます。ベテランの教員も元気をもらいますし、笑顔が自然と増えてきます。
- 事務仕事も手伝ってくれますし、授業の準備・後始末も手伝ってくれ、授業に集中できます。また、授業中は少人数指導も可能で、学力・体力の向上が期待できます。
- 若さが溢れた明るい挨拶、休み時間の児童とのふれあいの様子から、良い刺激を受けることができた。ベテランの教員、若手教員にとっても、自分の今まで身につけた指導力等を振り返る良い機会となった。人材育成について、それぞれの立場でできることを考える機会となった。
- 子どもたちがとても喜んで、学級、学年、学校全体の雰囲気よくなり、活性化した。中堅教職員のモチベーションの向上と指導力向上を図ることができた。学生が校内にいることによって、職員室の雰囲気が明るく和やかになった。また、少しでも学生の実習のために教職員がいろいろな配慮ができるようになった。
- 授業公開することで、校内研修のテーマや課題をより意識した授業づくりに取り組むことができた。児童が実習生とふれあうことをとても楽しみにしており、授業にも意欲的に取り組んでいた。
- 養成段階の受講者を指導助言することで、教員自身が取組を振り返る良い機会となった。学生だけではなく、若手教員への指導の必要性への意識付けにもなったと思われる。
- わずかな期間であっても該当クラスの児童の個別支援を行うことができた。
- 教育実習生の前向きな取り組みに触発されて、職務への張り合いも生まれてきた。自分自身の実践力を見つめ直す契機にもなった。
- 実習生を指導することを通して、私たち自らの指導を振り返ることができた。行事の少ない3学期に、意欲あふれる実習生を迎え、学校全体の活性化につながった。実習生の対応が、生徒指導上課題を抱えた児童への励みとなった。
- 新規採用者の急増による学校現場の危機感を教職員が実感し、人材育成の必要性が強まり、OJTによって若手教員に力を付けていくことの重要性も理解してもらった。
- 教師になるという強い意志と意欲の高い学生を受け入れたこと、また、真摯に体験実習に取り組む姿から、学校全体が学生を支援しようとする雰囲気や体制が整っていった。また、道徳の授業では、質の高い授業を行い、見学した教員の刺激になった。
- 個別の支援が必要な児童への対応や、行事の準備・当日の補助等、教職員の仕事を補佐してもらうことができる。
- 体験実習と養成講座が平行して行われることで、実習生に教師力が効果的なのを感じた。また、養成講座を定期的に行うことで、実習生同士の情報交換もできており、お互いの悩み相談もできていた。

■教師力向上プログラム(教師力養成体験実習)アンケート結果 (実施校)

5 本制度を実施する上での課題について

- 「〇〇すればうまくいく。成功する」というHOW TOものに意識が向き、先行事例を追試することに固執したり、先輩教師の授業もHOW TOの視点から観てしまう実習生が気になる。大切なことは、授業を通して子どもを育てることである。子どもの実情をどう見取り、自分だったらこうしてみたいと考えながら議論をかわし、授業を共に作っていく過程の大切さを、先輩の後ろ姿から学んでほしい。また、「参観立場」の意識が抜け切れていない実習生もいる。主体的に指導の補助に入り込んでいく意識を高めるための指導者側の配慮が必要である。チューター(ボランティア)として入っている学生との対応の違いも含めて、実施内容を整理していく必要がある。
- インターンシップ、教師力向上が同じ時期に来るので、受入側は混乱する。教師力向上を受け入れた学校は、インターンシップは外すなど配慮してもらえるとありがたい。指導案の指導は、学校がどこまですべきか悩んだ。あまり厳しく指導すると、学生側も指導担任も負担になる。
- 「カリキュラム」と「評価」が一番の課題であり、今後よりよい在り方が検討されることを期待しています。
- 特にありませんが、新しいことが入ってくる度に学校側に負担がかかってきますので、アンケートや評価もそうですが、それでも時期的にいろんな業務がありますので、なるべく学校側の負担は少なくすむようにお願いします。
- 今年度は初年度ということもあったのだろうが、余裕のあるスケジュールでの実施をお願いしたい。また、学生によっては、この制度が十分周知されていなかったとの話も聞いたので、よりよい人材発掘のためにも、周知の在り方についても、来年度以降検討をお願いしたい。
- 本制度が広く周知され、学校現場でもある一定の体制が組まれることが必要である。(実施校によって対応がまちまちという話も耳に入るの。)大学との連携がどれだけ取れているのかも、体験実習を行う上では重要な要素である。
- とてもよい制度だと思います。制度や実習生の目的意識が明確であるため、実際に後継者を育てるという意識が学校内でも高くなり、実践的な教育実習を行うことができます。ぜひとも継続していただきたいと考えます。また、一層の広報活動をするにより、意欲のある希望者が植えたり、受け入れの学校の理解が深まったりすると思います。
- 実習校が自宅から遠いと冬場のため、朝夕が暗く、出退勤時に危険を感じる場合があります。できるだけ近くの学校への配慮が必要だと思います。
- 今回は、該当学生が、本校で7月から学生ボランティア支援を行っていたので、体験実習①と②をスムーズに行うことができた。しかし、ボランティア支援をしていない学生を受け入れる場合、決定後は該当校へのボランティア支援を積極的に行い、該当学生が事前に学校や学年、学級の児童の実態を把握し、授業参観等を体験実習①までに経験することが学生の指導力・授業力の向上につながると考える。

■教師力向上プログラム(教師力養成体験実習)報告書 (受講者)

1 全体的な感想(反省点)や今後の展望について

- 全19日間の実習で、困り感のある児童への支援やプリントの丸つけ、児童との外遊び、実地授業を3日間、プチ音楽会、歌唱指導をさせていただきました。たった19日間ではありますが、子どもたちの身体面や学習面の成長を見ることができました。毎日、児童の下校後に担任の先生と子どもたちの気になったところや頑張っていたところをお話することで、子どもたちとしっかりと向き合うことの大切さや、見るポイントを学びました。
- どのように子どもたちをひきつけるか、学習に取り組ませるための方法などを目で見て、感じて学ぶことができた。また、授業以外にも、社会で生活するために、必要となってくる常識やマナーを身につけさせるために、先生として何をすることができるのかを学ぶことができた。
- 学校の主役は子どもたちであり、その子どもたちが生き生きと学校生活を送っていくために、教員は子どもたちとコミュニケーションを十分にとって、信頼関係を築いていかなければならないことを学ぶことができた。
- 附属小学校などの研究校ではない公立学校の教員研修会の場に立ち会えたことで、実際の現場の研修がどのように行われているのか、協議の内容やその視点、現職の先生方の意見や着眼点などを学ぶことができた。実際に子どもを見続けている先生方の意見は、「子どもがどう変化するか」という点を踏まえていることを学べた。
- この実習で一番悩んだのは、子どもとの関係の作り方です。小学校高学年の子どもと関わるのは初めてで、向こうから近づいてこない子どもを相手にどうしたら良いのか本当に分かりませんでした。このままではだめだと思い自分から進んで関わるようにすると、今まで以上に子どもがかわいくなったし、子どもたちの頑張りが見えるようになりました。このことは本当に大きな学びでした。
- 教師力向上プログラムに参加し、実習の機会をいただき、本当に貴重な経験になりました。子どもとのかかわり、学級経営、教師の仕事、授業、会議や研修など大学では学べないたくさんを学ぶことができました。また、教師になりたいという気持ちをより強く持つことができました。
- 職員室でのアットホームな雰囲気が印象的だった。また、先生も完全でなく、失敗したり、児童の対応に困り果てたりという面があることも知った。それでもそれを相談し合い高め合える輪と高めようとする情熱があるところも知った。教員間のつながりも見えて、それも魅力だと思った。
- はじめは児童との関係づくりに悩んでいた私ではあったが、最後児童一人ひとりにメッセージを送る際には、頭の中に一人ひとりの思い出が浮かび、もっとこのクラスにいたいと思った。この経験を生かし、これからも児童一人ひとりと深く関わる必要性を追い続け、関わりから生まれる様々な感情を大切にしていきたい。
- 自分で授業をつくってみても、活動だけになってしまいがちであったが、先生方にご助言をいただきながら授業づくりを行うと、しっかりと子どもたちの考える時間ができたため、授業終了後にめあてに対する答えが子どもたちから出るようになった。めあてに対する答えが出てきたときは、本当に嬉しく、今回の実習でできるようになったことの1番大きなところであると思った。
- 授業だけではなく会議や研修会にも参加させていただくことで、実際の現場の雰囲気を感じることができとても充実した日々を過ごすことができた。この経験をこれからある委託実習や将来 教壇に立つときに活かしていきたい。
- 授業を通して気づいたことは、児童を思いながらの授業はとっても楽しいということだ。「上手く流さなくては。」そのような自分勝手な思いではなく、「児童と一緒に創りたい。」その想いのある授業は児童にも、私にも、よい授業になると体感した。
- 実習を通して、教育者として大きな一歩を踏み出すためには、自分自身の教育観をしっかりと持っていくということが大切であると強く感じた。子どもたちに親身になって向き合えるか、一生懸命で熱意があるか等、これから様々な力を身につけ、蓄えていかなければならないと思った。6回の実習ではあったが、大学やプログラムの講座での学びを結びつけ、現場で体感できたという、自分にとって貴重な経験になったことがたくさんあった。

■教師力向上プログラム(教師力養成体験実習)報告書 (受講者)

1 全体的な感想(反省点)や今後の展望について

- 授業を行う中で講座でも学んだ繋がりのある「めあて」と「振り返り」をしながら授業展開していく授業づくりの難しさを知った。私自身今まできちんと「めあて」を立てた指導案を作れば授業は「振り返り」に向かうものと考えていた。しかし、実際に授業を行ってみると児童の考え方、感じ方、答え方によって「めあて」とはかみ合わなくなることもあると知り、児童の意見を尊重し児童に合わせた授業を展開していきながらも、授業の核となる事柄は変えないような授業を行っていくことが大切であると感じた。また、一日担任を行う中ですべての教育活動全体を通じて、常に児童一人ひとりをきめ細かく観察していくことが大切であると改めて感じた。
- 実習で一番学べたことは学級経営であった。褒めることの大切さや叱ることの難しさ。信頼関係を築く必要性など「分かる授業づくり」のために必要な基盤こそが学級経営だと強く感じた。

2 教師力養成体験実習(指定教育実習)に関する要望等

- 私は大学の授業が少なかったため、6日とされていたところ、12日間と7日間と規定より多く実習をさせていただき、とても幸せでした。3月もチューターとして参加させていただくのですが、2月までではなく、3月まで、実習ができればよかったです。いつもの大学とは全く違うもので、4か月間子どもたちの成長を見れたり、校内研修や職員会議などいろんなものを見れたり、多くのことを吸収できた充実した実習でした。
- 教師力養成体験実習で、私は非常に充実した時間を送ることができ、今後に向けて視野を広げる貴重な機会となりました。授業づくりはもちろんのこと、入学児童説明会の補助や保護者への対応などさまざまな体験をさせていただき、とても感謝しております。
- 実際の現場・現状をより早く生の声で聞くことのできる本場に近い制度であると思いました。体験実習を通して、自分自身の意識が大きく変わったように思います。プログラムの実施期間を早めて、より長く現場と関わっていけると、もっと力をつけることができると思いました。
- 体験実習の期間中、週5日すべて大学の講義があったために、1日丸ごと小学校に行くという経験がなかなかできなかったため、大学との授業の兼ね合いをどうすればいいのかが難しいところでした。
- 大学生にとっては、4年生の公立小学校で行う委託実習の前に、公立小学校で実習をさせていただくことは、とても嬉しく次につながるようなよい経験となりました。
- 実習をより有意義なものにするために、なんらかの形で先生方が実習生を、目に見える形で評価してくださると、実習生としてはより自分のよい点や改善すべき点が見えてくるように思います。自己評価ももちろん大切であるとは思いますが、客観的な評価があるとより良い学びにつながったように感じます。
- 体験実習では、研修を見させていただいたり、職員会議に出させていただいたり、先生とたくさんお話させていただいたり、とても充実したものであった。
- 教師力養成体験実習では、今まで考えることができなかった視点で授業を参観させていただき、授業づくりのポイントについてよくご指導をいただいた。先生方の様々な授業を拝見し、「こんなやり方もあるんだな」や「こんな支援をすれば低位の子もわかるんだな」と机間指導をしてわかることもあった。また、子どもたちと接する楽しさや成長を少しずつだが感じる事が出来た。実習をさせていただいて、自分を大きく成長させることが出来たと思う。
- 実習時期は11月の実習が大学の講義と被ってしまい、講義を休んでの実習となった。こちらの要望としては週に一度終日休講の日があったのでその期間で行きたかったのだが、小学校側との日程が合わなかった。できれば講義を休まずに行きたかった。私は学校体験制度を行っていたので、実習期間は前半4日間、後半6日間の計10日間の実習となった。「〇日以上」となっていたため、学校によって実習日数が異なった。また、実習内容も学校によって異なっていたため、皆同じ基準で行った方がよいのではないかと思った。

採用前教職インターンシップの実施状況

1 趣旨

新規学卒採用予定者が、自信をもって4月から教壇に立つことができるよう、採用予定決定後、大学卒業までの期間に教育実践を積むことで、教職への適応力を高めるとともに、児童生徒を理解し惹きつける豊かな人間性や子どもたちの確かな学力の育成を図る授業力、生徒指導に関する力などの教員に求められる実践的な指導力を向上させる。

2 期待される効果

【新規学卒採用予定者にとって】

- 限られた期間に行う教育実習での授業と異なり
- 時間をかけた授業づくり
- 多くの(多学年での)授業実践や教育実践
- 採用後も担当教員に相談(メンターの機能)
- (現職教員との人間関係の深まり)

【実施校にとっては】

- 教員の授業や業務の補助を行う学習支援員の活動が可能
- 採用予定者が教育実践に一生懸命取り組む姿は、児童生徒はもとより学校の活性化につながる。

【大学にとっては】

- 教職実践演習など大学の講義への活用

3 事業内容

- 概要：県教委が指定する学校で、2週間で1日程度学校を訪問し、最低1時間の授業と教員の業務の補助を行う。
 - ・長期型……11月～2月の間、授業のない曜日に学校を訪問し、授業実践や教育実践を行う。
 - ・短期連続型……一定期間集中して学校を訪問し、授業実践や教育実践を行う。
※長期型での参加が困難な者を対象に実施
- 対象者：平成27年度山口県公立学校教員採用候補者名簿掲載予定者の内、平成27年3月に大学又は短期大学を卒業予定の者及び大学院を修了予定の者。ただし、小学校教員採用候補者に限る。(大学院2年生、大学4年生、短期大学は2年生)
- 実施時期及び期間：平成26年11月10日(月)～平成27年2月28日(金)の5日程度
- 参加者：45人(男性7人、女性38人)
※山口大学22人、山口学芸大学13人、梅光学院大学2人、福山市立大学2人、熊本大学、長崎大学、西南学院大学、中村学園大学、広島女学院大学、関西学院大学 各1人
- 実施校及び受け入れ人数：8市1町27校に45人



岩国市	周防大島町	周南市	山口市		防府市	宇部市	山陽小野田市	下関市	萩市
玖珂小(1)	城山小(1)	富田東小(1) 福川小(1)	大殿小(2) 湯田小(3) 大歳小(3) 大内小(2) 小郡小(3)	白石小(3) 良城小(3) 平川小(3) 大内南小(3) 小郡南小(2)	新田小(1)	上宇部小(1) 厚南小(1) 二俣瀬小(1) 西宇部小(1) 川上小(2)	高千帆小(1) 小野田小(1)	向山小(1) 安岡小(1) 川中西小(1) 長府小(1)	育英小(1)

○実施方法及び実施日数別参加者数

	実施日数											合計
	5	5.5	6	7	8	10	10.5	11	12.5	13	14	
短期連続	21	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	23
長期型	6	1	4	1	1	3	1	1	1	1	2	22
合計	27	2	4	1	1	4	1	1	1	1	2	45

○教育実践内容

学習活動の補助、学習プリント等の点検・丸付け、日記指導補助、給食指導補助、清掃指導補助、休み時間の指導、図工等における用具等の準備、教材づくりの補助、委員会活動参加、代表委員会参観、特別支援学級指導補助、一斉下校指導補助、参観日授業見学、花壇の整備、校長講話(着任に向けての準備・心構え)、分掌会参観、学校行事の指導補助、卒業式ひな壇づくり、クラブ活動の指導補助、学年会への参加、校内研修への参加、外国語活動参観 等

4 事業成果

- 多学年での授業実践や教育実践はもとより、新規採用予定者であることから、学校支援ボランティアや教育実習等では体験できなかった、登下校指導や会議、校内研修や職員会議、学年会への参加、分掌業務等、様々な業務に携わることができ、教員同士の連携や役割分担、地域とのつながりなど具体的にイメージすることができ、教員としての使命感が高まったという感想が寄せられるなど、多大な成果・効果が報告されている。
- 学校にとっても、新規採用予定者が教育活動に加わることで、学校教育が充実すると大変歓迎されている。また、新規採用予定者であることから、教員の意識が高まり、様々な教育活動に積極的に加わせるとともに指導も充実させている。結果として、学校が活性化し、教員の人材育成につながり、何より子どもたちが一番喜んでいっているといった効果が報告されている。



5 事業成果を踏まえた今後の方向性 (拡充)

- 平成27年度「総合的な教師力向上のための調査研究事業」に申請し、「山口県の教師塾」の主要事業として位置付け、平成26年度の参加学生、実施校、市町教委、大学等からの意見を参考に、成果と課題を踏まえながら、採用前教職インターンシップの改善・充実を図るとともに、現在、小学校を対象に実施しているが、中学校や養護教諭の実施についても検討する。



■採用前教職インターンシップ報告書（参加者）

1 全体的な感想（反省点）や今後の展望について

- 私のお世話になった小学校では、1～6年生まで入り、参観させて頂きました。その配慮もあり、各学年での学びや成長段階を見ることができました。とても有り難く感じています。（このような経験がありません）
- 今回、様々な業務に参加させていただく中で、これまでの大学での取り組みや実習等の中でははっきり見えていなかった、学級経営（小さなきまり、必要なルール）について学ぶことができました。同時に、1日担任等の実践の中で、教師自身の時間の使い方や細かい業務内容まで、見ることができました。このインターンシップでの様々なことに参加させていただくことで、4月にむけて漠然としたものが明確になったように思います。
- 今までの教育実習とはちがいが、4月から教壇に立つ者としてインターンシップをしてきて、とにかく教師は時間との戦いなのだ、ということを感じました。教材研究、校務分掌、そして子どもたちの指導や保護者対応といったように、常にたくさんの方の顔を頭で考えながら過ごさなければいけないと思いました。
- 短期型、長期型の設定を自分で行うことができるところがとても良いと思います。
- インターンシップ6日間を通して、実習では感じられなかった教師の多忙さを改めて実感するとともに、時間が限られている中でいかに子どもたちとかわかっているのかという課題を見つけることができました。4月から小学校教員として担任を受け持つことに非常に不安で仕方なかった。しかし、インターンシップでの経験があり、どこに不安や課題を抱えているのか、心の整理をすることができたので良かった。インターンシップに参加して本当にいい経験をさせていただいたことに感謝している。
- 日々の授業補助だけでなく、教育相談、職員会議、学校行事、委員会活動、懇談会など、様々なことを見て、学びました。授業は2年生の道徳と算数をさせていただき、教育実習ではできなかった様々な体験をさせていただくことができました。
- 学級担任として聞き合う姿勢を私も大切にしたいと思います。一人ひとりを大切に作る学級をつくるためには聞く姿勢は大事なことのひとつと分かりました。先生は子どもと共によりよい学級づくりをするために、係活動などで子どもの主体性を大事にしておられると思いました。懇談会で保護者の方々とかかわり、先生は保護者とともに子どもを育てていこうとする思いがとても大事だと分かりました。
- 大規模校を経験して教員間の連携がとても重要ということを改めて感じた。授業では進度の早い子と遅い子の時間差を上手に埋めていく必要があると思った。終わった子は読書という場面が見られたが、どうしても時間がこま切れになってしまう。読書はまたまった時間でさせていきたいので、その授業での課題について何か発展的なものを用意できるようにしていきたいと思う。
- 教育実習の頃と比較してより多くの仕事について学ぶことができた。授業を行うだけでなく、休み時間での指導、学年部・上司・保護者との連絡事項等は教育実習期間に教わっていても、実際にを行うことはなかったため、良い経験になった。
- 学習規律の大切さを学びました。授業中の発表の仕方、手の挙げ方、姿勢などが、輝いているクラスの授業を見た後に先生にたずねると、4月の時点で学習規律を指導されたと言っておられました。めりはりのある学級づくりをするためには、学習規律に力を入れることが大切だと感じました。
- 教育実践を通して、実際の子どもの発達段階などを肌で感じることができたと思う。教育実習では、一つの学年しか担当できなかったが、全学年を見ることで、一つ学年が違うだけで、こんなに差があるのだなと感じた。また、一日はあつと言う間に終わってしまい、その中でどのように、どれだけ子どもと触れ合うことができるのかということが、子どもとの関係や授業態度にも関わってくるのだなと、先生方の姿を見て感じた。

■採用前教職インターンシップ報告書（参加者）

1 全体的な感想（反省点）や今後の展望について

- 教育実習の時よりも、さらに踏み込んで教員の姿を見つめることができ、教員になるという実感を改めて意識することができた。懇談会や連絡会、校内研修など、言葉では聞いたことがあったが、実際の様子を見たことがなかったため、今回経験できたことが4月から教員として働く上でとても参考になり、今回の経験を少しでも多く生かしていけるようにしたい。
- 実際に授業をさせて頂き、大学生活で学んだことである、表現力や、声かけの仕方、子どもへの寄り添い方など多くのことを自分の良さとして実践できた反面、発問の仕方や時間配分の仕方などまだまだ実践が足りず、課題が多くあるということを実感しました。4月までに自分の課題を改めて見つめ、少しでも改善できるように残り少ない時間を大切に、向上していきたいです。先輩の先生方や、恩師の先生にアドバイスを頂き、教師としての技術面だけでなく、精神面でも高めていきたいと感じました。
- 教育実践を通して学んだことは「百聞は一見にしかず。」ということですが、インターンシップに行かないと得られない学びが沢山ありました。現場は限られた時間の中で、目の前の子ども達との関わりが求められます。授業をして課題を多く発見できたことは自分にとって大きな収穫です。学びの引き出しをこれからもどんどん増やし、子ども達と4月から一緒に成長していきたいと思いました。
- 学年にも応じてではあるが、子どもが自分で考えて行動ができるようにしていくことが大切であると感じた。授業の時間となったから、「国語の準備をするよ。」と声をかけるのではなく、「時計を見て動いてね。」と声をかけると、自分のペースと時間で考えて子どもが行動することができた。
- 教材研究をして、子どもの実態を考えながら授業をすると、その準備に比例して、子ども達の授業の内容が深まったのではないかと感じました。そのため、児童観・教材感・指導観を計画し、教材解釈をしっかりとおこなっていくことが大切であるということが分かりました。子ども達とふれ合う時間を大切に、子どもの気持ちをくみとりながら、子どもの実態を理解することが子どもの気持ちに分かる教員になる一歩であると感じました。
- 特別支援学級の研究授業を見学した。特別支援学校の授業以外では、見学したことがなかったので、とても新鮮だった。一人ひとりに応じた支援がされており、子どもがいまいきいきと活動できていた。
- 2週間を通して、子どもとのかかわりや、学習指導及び生活指導を主に学ぶことができた。子どもとのかかわりについては、いつ叱り、いつほめるのか、また、叱る方法やほめる方法を特に学ぶことができた。学習指導及び生活指導については、効果的な授業の方法や教材、子どもが集中して学ぶことのできる授業構成や教師の話し方を学ぶことができた。また、実習では見ることでできなかった放課後の仕事や、会議、研修も体験することができ、教師の仕事より深く知ることができた。
- 5日間という短い期間であったが、実際に朝から夕方まで学校の様子を見ることができ大変貴重な経験になった。小学校の教職員の方の授業や教室環境を見させていただき、4月から真似していきたい点が多くあった。インターンシップ前は、4月からの教員生活に不安を感じていたが、今回のインターンシップに参加し、1週間小学校で過ごすことによって、4月からの教員生活について考えることができ、不安に思っていた点も小学校の先生に聞いて不安や疑問に思っていた点も解決した。4月からがより楽しみになった。
- インターンシップに参加して、教育はチームで行っていると感じた。4月から採用となる立場として、私がチームの中に入っていく、チームの一員として働いていくといったことを忘れずに教育に関わっていきたくて考えた。
- 採用が決まってから、実習に行く機会がなかったため、今回の採用前教職インターンシップはすごく学びが多く充実したものに感じた。また、12月末の研修での「先輩教師に学ぶ」で聞いた話を受入校で実際に見たり感じたりできたので良かった。すごく不安なまま4月を迎えてしまうと思っていたが、今回のインターンシップで楽しみな気持ちが強くなった。

■採用前教職インターンシップ報告書（参加者）

2 採用前教職インターンシップに関する要望等

- 1週間にプラスして、1～2か月ほど副担任という形で、見ていけたり、学ばせて頂けたら、学びに不安を感じる子どものサポートにも、担任の多忙感の解消にも、そして、新任の不安もはぶくことができるのではと思いました。
- 学校内の様々な視点から多くの経験をさせていただき、大きな学びを得ることができました。チューター等とは少し異なる立場として、このような経験を参加者全体が行うことができれば、4月からのために有意義なものになると思います。
- インターンシップ配属校の通知が来てから、実施期間決定の書類提出までの期間がとても短い印象を受けたので、もう少し余裕があるとありがたいです。
- 期間、内容等とても良いと思います。採用前にこういった経験をする事で、教員となる自覚をしっかりと持つことができました。
- 実施時期・期間については、大学の行事上、余裕があったため、よかったです。研修内容については、満足のいくものでしたが、受入校も私も手探りで内容を決めたので、インターンシップでする内容項目をいくつか決めていただくと、もっと充実した研修が行えたのではないかと思います。
- 実施時期、期間については学校との相談の上で決定できるため非常によと感じた。内容も自由度が高く、やりたいことをさせて頂いたのよ良かったと思う。住居地の近くの学校で実習を行うことができたため、安心して取り組むことができた。
- 先生の時間の少なさである。個別に対応しなければいけない子どもや仕事量の多さなどずっと先生と行動を共にしていたからこそ見てきたことがたくさんあった。どれだけ仕事をききこなせるかが勝負であると感じた。来年からは子どもの見本となり、子どもからこんな大人になりたいと思われるような行動を常に心がけなければならないと感じた。
- 学校により規模の大きさや特色が異なってくるので2校で実施すると、教員としての視野が広がるかもしれないと思う。
- 授業等の関係上、実家と大学を往復し、その後インターンシップ校に行くことも多かったため、なるべく校区内の学校をインターンシップ実施校にしていただけたらありがたいです。
- 教員になる前として多く学ぶことが出来る。そのため、期間を少しのばしたり、一年目の先生の話が聞ける機会があればいいと思った。
- 授業実践をより多く行ったり、他のインターンシップの方の授業も見させて頂く時間があると、より勉強が深まるように感じました。実践期間や、時期も選択することができたため、自分に合った研修を行うことができ、学びが深まりました。
- 親身になって教えて下さる先生ばかりで、濃い学びをインターンシップを通して得ることができました。大学の後輩達にもインターンシップでの学びを伝えていこうと思います。私は山口県の大学に通っているため、インターンシップに参加することができたのですが、県外の大学に通っている山口県の教員採用に合格した何人かの友達は、最低5日の条件をクリアするのが難しいということで、インターンシップに参加するのを断念していました。県外の学生のみ1、2日のインターンシップを山口県内の小学校でできたらなと思いました。
- 大学の授業が週5日あるため、インターンシップで授業を休まなくてはならなかったため、1日中出勤だけでなく、部分的に出勤という形もあれば授業を休まずにインターンシップを行うことができたかなと思いました。
- 長期間にわたり、大変お世話になりました。大学4年の後期、だけではなく、1年の頃からこのような機会があると嬉しいです。
- 私は県外の大学に通っておりAFPYについて何の経験もなかったため、子どもたちの中でAFPYを経験できたことがよかったです。要望としては昨年の採用前教職インターンシップを経験をされた方の具体的な教育実践の内容（業務日報等の写しなどで）事前に知ることができたらよかったです。
- 自家用車が使えないので、徒歩で通える範囲の学校に配置して頂けると助かります。交通費の面や、公共交通機関の本数も限られており、通勤のしにくさを感じました。実施時期や期間については、実施校と相談して決めることが出来るので、山口県外の大学に通っている私は大変助かりました。

■採用前教職インターンシップのアンケート集計結果(市町教委)

1 採用前教職インターンシップの実施について

- 採用前の学生を預かるため、学生が「こんなはずではなかった。」というネガティブな考えを持たないよう校長は配慮していた。本年度は学生が希望するインターンシップ先が校内研修体制の進んでいる学校であったため教育委員会としても安心して事業を進めることができたが、仮に困難校を指定した場合の対応については実施校の決定について考慮する必要がある。
- 本市は県の東部に位置するため、大学在学中に講義の空きを活用してインターンシップをすることは困難で帰省時の短期集中型による受け入れに偏るが、受け入れ側の学校は支援員やボランティアの形で長期にわたるかわりができる学校運営にも好影響が期待できる。
- 採用前に実践により近い形で、教育実習が行えることは、新規卒採用予定者にとっても、受け入れる学校にとっても、それぞれに良いものと思われる。
- 意識の高揚のためにも、より現場に近い形での研修の機会を今後とも増やしていただきたい。
- もっと、学生が何の縛りも無く、進んで学校に関わったり、学校の受け入れができるようになることが望ましい。
- 制度そのものも良いと思うが、このような制度が学校現場に浸透していけば、全教職員で人材育成に取り組んでいこうとする意識が強化され、更に大きな効果が期待できる。
- 4月から本務者として教壇に立つ人たちにとって、大変貴重な機会となると考える。新卒者にとっては、教育実習生としての学校現場の経験しかないため、特に必要だと思う。
- 新規採用教員が精神疾患を患うことが毎年のように起こっていることを考えると、希望を膨らませる授業や遊びでの子どもとの体験だけでなく、「保護者から苦情があった」「子どもとの関係をうまく築けない」「授業や初任者研修の事務処理に追われている」等の新採者が遭遇することが予想される困難な面について、指導したり、その対応策について助言したりする内容を含めることを必ず入れるようにしてもよいのではないだろうか。
- 学生にとって、学校の実状を見ることができよい制度だと思います。
- 着任前の不安解消や着任後の業務への適応力を身につけることができるため、有意義な機会と感じている。
- 将来的にはその市町で教鞭を執る可能性のある採用予定者を育成、指導するのは当然のことであり、指導力がつけられれば市町にとってもプラスである。学校にとっても、教員の業務の補助を行っていただくことが可能で、まさにWIN-WINの関係である。
- 採用前教職インターンシップに参加する学生は、4月からの採用が決定したものであるため、本人にとっても目的意識をしっかりともつことができる。また、学校にとっても、意欲的な学生が来るため、プラスになると考えられる。また、参加する学生をしっかりと教えることを通じて、教職員自身の資質向上を図ることができるため、学校にとってもメリットがある。
- 卒業者にとって候補者名簿登載が決まり、27年4月から教職につくことに希望と不安が入り交じるこの時期に、6月の教育実習以来の学校を経験できるこの制度は非常に意味があり心強いと思います。心構えもでき、4月からスムーズに学校に入れるように思います。

■採用前教職インターンシップのアンケート集計結果(市町教委)

2 実施のスケジュールについて

- 学校規模の小さい学校の多いところでは、どの学年でも、どの学級でも受け入れられるとは限りません。時期を早めることができれば、一部の教員だけの負担増にならずに済むのかなと思います。(実際には、9月末以降の計画になるのは、避けられないでしょうが・・・)
- 今年度の実施スケジュールであれば、問題はなかった。
- 市町からの実施校決定回答と県教委からの実施校決定通知の間に時間的に余裕がないと感じている学校もあるようである。
- 市教委からの実施校への支援が難しかったので、実施校との連絡に市教委を経由していただくと助かります。
- 主として学生のスケジュールに合わせる形にはなると思うが、11月から2月末という比較的幅のある期間が設定してあるので計画が立てやすい。
- 少しあわただしい面もあるが、採用試験の結果を待ってスタートすることを考えると、適切なスケジュールと考えられる。

3 本制度を実施する上での課題について

- 教育委員会の訪問が事前にわかっていると学校が対応しやすい。
- 教員免許を持っていないことから、読み聞かせ、テストの採点、子供の休み時間における個別対応等を実施させた。学校行事が少ない時期であるため、来年度以降も同程度の活動内容になると思われる。
- 現在CS等で、どんどん学校は、地域人材等を活用しています。万が一を考え、保険等の整備もあるのですが、一住民としてでも、どんどん関わっていくようになると良いと思います。(周防大島町出身者が増えることを期待しています。)
- 今年度、本市では2校の小学校で5日間の期間でインターンシップを実施している。両校ともに、スムーズに受け入れを行い、予定どおりの計画を実施することができた。現状では大きな課題を感じていない。ただし、今後は、県内の校長が集まる場などを活用して、この施策の成果をしっかりと伝えることが大切だと思う。また、多くの学生が参加できるように、関係大学との連携をしっかりと取っていくことは必要なことだと思う。
- 本制度と教師力養成プログラムの制度の時期が重なることで、学校側が各制度の趣旨を十分に理解できていない状態で学生に対応したり、両制度の学生が同じ日に実習に来ていると指導する学校側も各実習生の趣旨に応じた対応をすることが難しくなったりすることが懸念される。
- 本制度の全体的な周知ならびに、受入校の校長等に対する活動内容の周知
- 本制度は、学生だけでなく教員自身の指導力アップにつながることから、学生、教員ともに制度について一層の周知を図り、継続して人材を育成していくことができる仕組みとして定着していくことが必要だと感じました。
- 不可能ではないが、遠隔地にある大学に在学する学生の参加の仕方が(短期集中型?)に限られてしまうこと。
- 本制度が、限られた学生だけではなく、今後参加者が増え、恒常的に行われるのであれば1学期の校長会等で、制度についてしっかりアピールする必要がある。
- 県教委が大学に制度をしっかりとアピールし、今まで以上に大学と協力する必要がある。

■採用前教職インターンシップのアンケート集計結果(実施校)

1 本制度を実施した成果について

■新規学卒採用予定者の変容等について

- 教職への夢や希望は膨らみ、教職の楽しさや喜びは十分に感じたと思う。教職への適応力を高めることは難しい。自分で計画を立て教育実践を行い振り返る活動でなければ自立的な教育活動はできない。それは教育実習で行うべき事である。
- 教員に求められる実践的指導力をつけることは難しい。自発的自主的な教育活動を展開しその評価を受け、次時の実践に生かすことで実践力は身につく。
- 教育実習では体験することができなかったことを得ることができた。授業だけでなく、教員の仕事としていろいろなことがあること等を本人が把握することで、新しい職場での適応力がついたように思う。
- 児童の発達段階を踏まえて指導法や声かけが異なることを学び、日々の業務に生かしていた。翌日の研修の視点を与えると必ず成果を報告したり、自ら先輩教員の学級経営や掲示物を参考にしようとする姿勢が見られた。いろいろと緊張する場面を経験することで(たとえば 全校児童や職員へのあいさつ等)不安が和らいだという感想を持っていた。
- 最初はどうしても遠慮がちで、担当教員の指示待ちであったが、日が経ち教員や児童に慣れてくると、担当教員のアドバイスもあり、自分から積極的に児童への関わりを持ったり授業の中で配慮が必要な児童に進んで支援をしたりするようになった。担当学級の児童だけでなく、休み時間など他の学級の児童にも声をかけ交流するようになった。放課後の限られた時間ではあったが、先生方にも色々と質問したり話をしたりして授業や児童への対応について聞く姿が見られた。先生方とのネットワークの構築ができた。
- 4月からの勤務に不安を感じていた様子であったが、少し気持ちを楽にして研修を終えてくれたように感じている。教員からの現場に即した情報提供や、子どもたちとかかわる時間を確保したことによる効果が大きいと考えている。また、学年を限定せずに幅広い学年で研修の場を設けたことも効果的であったと感じている。
- 大変意欲的で、日を追うごとに児童への対応に変化が見られた。学習指導や生活指導を通して、成長段階に応じた接し方、個々にあった接し方の重要性に気づいたようである。児童とのふれあいを積極的に行い、よい関係を構築できた。
- はじめは、参観しているだけといった様子だったが、回数を重ねるごとに、指導意欲が高まり積極的に児童の指導にあたるようになってきた。
- 教育現場の様々な面に触れ、教育現場の業務の多様さ、多忙さを感じていた。多くの児童に接し、個々の児童の幅広い特性を感じていた。
- 「適応力を高める」といった点では、4月の採用に向けて、心の準備をすることができたと考えている。「実践的指導力」といった点では、インターンシップ中に自己の課題をいかに見つけ、採用までに準備できるか、終了後の過ごし方が大切になる。
- 採用予定者は、授業を参観したり授業の補助をしたりすることについては、教育実習等を通して経験してきたようであったが、今回は、様々な学級事務や校務分掌、生徒指導等の学習指導以外の業務について経験できた。2名とも「教職に就く直前に、大変貴重な体験をさせていただいた」と感想を述べており、成果があったと言える。
- 授業を参観するだけでなく、学校行事の補助や手伝いにかかわる中で、1つの行事を行うにあたり多くの人が裏方として支えていることに気づき、自ら仕事を引き受けようとする積極さが見られるようになった。
- 教職に就くという気構えができてきたように思う。
- 山口大学の学生は2週間の基本実習しか経験しておらず、慣れるのに少し時間がかかったが徐々に児童への接し方も上手になってきたようで、インターンシップ事業の成果が見られた。

■採用前教職インターンシップのアンケート集計結果（実施校）

1 本制度を実施した成果について

■新規学卒採用予定者の変容等について

- 新規学卒採用予定者としての自覚をもって臨んでおり、開始当初から大変よい動きであった。「職場としての学校」を体感できたことは、本人にとって得難い機会であったと思う。採用後、スムーズに職場になじんでいくであろうと感じられた。児童への関わり方がよりよくなっていった。
- 来春の採用を前にして、教育実習以来の現場となることへの不安を口にしてはいたが、採用前に再度児童と触れ合うことができ、教師としての感覚を取り戻したようだった。担当教員や学力向上指導員による指導案、授業づくり（教材づくり）の指導により、学習目標を明確にした児童の視点に立った授業づくりを学ぶことができた。学習指導上、生徒指導上、特別な配慮を要する児童への指導に携わることができた。
- 具体的に学校現場を見聞することで、当初抱いていた不安が減少した。
- 教師としての児童との距離感のとり方、関わり方を身につけていってほしいと思ったが、良い経験になったと思う。
- 最初の頃は緊張や不安が見られたが、児童とふれあったり補助を続けたりしていくうちに多様な見方ができるようになり、新規採用への意欲が高まってきたようだ。
- 多様な児童に触れ、実際に指導してみることで、教師という職業を実感し、来年度からの業務に向けた心の準備ができたように思う。
- 教育実習では体験できなかったこと、実習後、大学の授業等を通して課題と感じたことなどを教育現場で確認することができるなど、新規採用に向けての準備ができるため、本人の不安等が解消されている。
- いろんな先生と話す機会がもてたり、日頃疑問に思っていることを聞くことができた。学級の中の仕事以外の仕事をいろいろと見ることもできた。2月最後の参観日に参加し、各学年の取組に感動していた。
- 社会人として職場を体験したことで、心構えや態度が学生から職業人へと近づいたようである。教員が集団として教育活動に取組む中に身を置くことで、真の教育現場を体験することができたようである。
- 来年度から教壇に立つという意識で、学校現場に身を置くことで、一人一人の子どもを大切にしながら授業をしたり、生徒指導をしたりしている現場の教師の仕事についての認識が深まった。また、実際に授業をしたり子どもと触れ合う中で、新たな課題が見えてきた。それを現場の教師に尋ねたり指導を受けたりした。
- 新規学卒採用予定者は、臨採経験者と違って経験がきわめて少なく、教育実習でのある意味実践しやすい学級での経験しかない。インターンシップでは、課題のある児童の日々の指導も含めて、普段の教育実践に触れる機会となり、4月からの教育者としての覚悟にも結び付くのではないかとと思う。厳しい現実に触れることで、夢と覚悟をもって4月を迎えることができ、離職者の減少にも効果が高いのではないかとと思う。
- 日々の教育活動を通じて、実践的指導力を培うことができたと考える。教師集団との触れ合いの中で、教員としてどのようにあるべきかを考える機会となったようである。

■採用前教職インターンシップのアンケート集計結果（実施校）

1 本制度を実施した成果について

■新規学卒採用予定者を受け入れる学校側の成果等について

- 多忙な職場で担当教諭の補助的な活躍をしていただき、子どもと真に向き合う時間が増加したことに感謝している。
- 若い採用予定者が学校に入ること、学校に活気が出たように思う。教職員にとっては、授業以外にもいろいろなことを協働してできるのでよかった。子どもたちが一番喜んでいて。
- 指導の意義やコツを伝えていこうとする取組みが見られ、受け入れ側も平素の教材研究や準備に力を注いでいた。この研修を通して新規採用予定者から職員で助け合う姿を学んだとの言葉に、本校の教職員も自らの学校のよさを自覚することができた。
- 学生の要望に対して快く授業を公開し、その後に簡単に授業についてや児童への関わり方などについて話す時間を持つようになった。（とても協力的に関わりを持てた）
- 人材育成が喫緊の課題であることは承知しているものの、事業を通じてその必要性を学校全体で再認識する機会となった。
- 児童とのかかわり方が、自然になってきている。児童の言動のよさを価値付け学習に活かしたり、寄り添って個別の対応をしたり、採用予定者それぞれの持ち味がみられるようになってきた。
- 学生、教員、児童相互の刺激となっている。個別の配慮を要する児童の支援や校外行事の運営面で、とても役立っている。いろいろな場面で、年齢の近い実習生とかかわることで、児童の中にあこがれ（目標）の感情が芽生え、キャリア教育の視点からも有効である。
- 個別の配慮が必要な児童に素早く対応ができ、学習指導や生活全般に有効であった。
- 要配慮児童へのサポートやTT体制での授業実践などにより、児童一人ひとりに目が行き届くようになり、学校の教育活動が充実した。
- 学校に新風を吹き込んでくれた。
- 本校では、教育実習や山大的チューター等の「若い人材を育てるシステム」の中に位置づけて実施することができた。30代の若手の教員を中心に担当させることで、若手教員の人材育成につながるいい機会となった。
- 人材育成が大きな課題となっているが、今回のインターンシップの受け入れで、若手の悩みは何か、知りたいことは何か、必要なことは何かなどをより深く理解することができるようになった。本校でも、若手が年々増えることが予想されるが、その人材育成の参考になると考えられる。
- 今回、期間中に持久走大会があり補助員等で参加していただき、大会をスムーズに進行することができた。学生がいるだけで学校（学級）としては活気づき、子どもたちも喜んでいて。
- 教職員に人材育成をするという意欲が高まった。
- 組織の活性化：若い力が入ることにより、職場に活気が出る。自分たちの日常の業務を振り返る契機となる。
若手教員の人材育成：若手のリーダーが担当者となり、「他を育てることによって自身も育つ」機会となった。
- 人材育成の観点から、中堅・ベテラン教員が積極的に指導に関わることにより、現任教員の自覚が高まると同時に、若い活力ある仕事ぶりに職場が活性化された。
- 夢多き若者に接することで、職員により刺激となった。説明や指導をすることを通して、自らの実践を改めて見直すことができた。
- 教師の意図に沿って子どもを見守る人手の存在は、特別な支援を必要とする児童の増加もあり、大変貴重であった。若い教師の存在は、ベテラン教師の刺激となり、教師集団の活性化に繋がった。
- 若い教員を育てようという気運の高まりから、学校全体が活性化された。

■採用前教職インターンシップのアンケート集計結果（実施校）

1 本制度を実施した成果について

■新規卒採用予定者を受け入れる学校側の成果等について

- 意欲のある方が、いろんな形で子どもたちに関わっていただき、大助かりだった。
- 採用予定者が傍にいて、教員の授業等へ取組む姿勢が意欲的になった。担任一人では、個別指導が行いに難い面をカバーしてもらうことができた。
- これからは人材育成の視点をもって仕事をしていくのだという意識を高めるためには、学校の職員にとってもよい企画だと思う。
- 全校体制で指導にかかわることで、中堅教員を中心とした教職員の資質向上を図ることができた。学校の活力となり、本校若手教員の刺激となった。
- 新規卒採用予定者への指導を通じ、日々の教育実践について教員自身が振り返る良い機会であった。

2 本制度を実施する上での課題について

- 本制度の目的を明確にする必要がある。教職員にとって最も大切な資質は、「子どもが大好きであり、一人一人の力を伸ばしてやりたい。」という強い思いである。教育実習や採用試験では教職員として必要な能力を量り高めることができる。本事業では、生の現場で大粒な汗をかきながら、子どもの今と将来の幸せのために必死で働く先輩の真摯な仕事ぶりに接することで、教職の素晴らしさややりがいを感じ、教職生活への夢や希望を膨らませることができる。目的は、「教職への夢や希望を膨らませ、具体的な目標を持つことができる。」等が現実にはマッチしていると感じる。
- 教育実習を行った学校でのインターンシップだったので、教職員の理解もあり、よりよいものとなった。ただ、全く知らない学校でのインターンシップは、本人には、きついかも知れない。
- 改善ではなく今回実施してみたの気づきとして、5日間という短い期間ということもあり実施できなかったが、4月から教壇に立つということを考え授業実戦を経験（指導案等は別にして）する機会を計画しても良かったかもしれないと思った（学生の要望があれば）。そうなる、もう少し実施期間が長くてもいいのかもしれない。
- 本校で受け入れた2名は、インターンシップの前週まで幼稚園での実習があり、研修期間の設定が難しかった。また、研修中は大学の講義が欠席扱いとなるため不安を感じていたようである。いずれも難しい問題であるが、改善できるものであればお願いしたい。
- まだ、「参観立場」の意識が抜け切れていない受け身の採用予定者もいる。主体的に指導の補助に入り込んでいく意識を高めるための指導者側の配慮が必要である。チューター（ボランティア）として入っている学生との対応の違いも含めて、実施内容を整理していく必要がある。半日実習を許可することで、学校へ来る回数（チャンス）は広がっているが、午前中で帰る日程を多く選んでいる採用予定者には、放課後の指導をする機会が、他の採用予定者よりも極端に少なくなってしまうことが気になる。
- 5日間なので、できることは限られます。今回のような体験内容でよいのであれば、なんとか対応できるように思います。
- 報告等は極力簡素化し、子どもに全力でかかわる経験を積めるようにするとよい。長期型だと、週1回ペースくらいになり、打ち合わせるのが1週間後のことなので、調整が難しかった。
- インターンシップで学んだことを再度フィードバックする時間と場があるとこの制度が生きると思います。教育実習やインターンシップだけでなく、もっと早い段階から学校や地域で様々な子どもたち（例えば障害のある子どもたち、施設で暮らしている子どもたち）などと接して、人間としての幅を広げる活動も必要だと思います。

■教師力向上プログラム(教師力養成体験実習)アンケート結果（実施校）

2 本制度を実施する上での課題について

- 新規採用予定者にとっては、教職に就く前の大変貴重な機会であるので、実施期間を延ばして、より多くの業務を体験できるようにするなど、有意義な制度になるとよい。
- 極力、学校現場の負担を考え制度を実施していただいていると感じるが、やはり複数の事業が重なり複数の学生が学校現場に入ってくると、配慮することも多く十分な対応も困難となります。事業の実施時期をずらす、あるいは同一校に配置する人数を極力抑えるなど配慮があると受け入れ側として助かります。
- 受け入れ校がこの制度の目的をしっかりと理解し（教育実習との違い等）実施しなければ効果が期待できない。本制度への受け入れ校の理解が重要である。担当者と本人とが1日を振り返る時間や情報交換の時間がとりづらい。
- 改善が難しいかもしれないが、学生の場合、大学における講義等により日程が限られた期間になるため、学校が意図的に提示した期間に実施することが困難であった。
- 出身校でのインターンシップということで、学校内の個人情報がかきと守られているか不安である。慣れない現場なので、遠慮があったと思うが、現場で主体的に学ぶという姿勢があれば、もっと充実していたと思う。
- どの時期に受け入れるにしても、受け入れ側の負担は生じてくる。新規卒採用予定者という性格上、教えていかなければいけないことも数多くある。受け入れる人数が多くなればそれだけ学校や担当の負担が増してくる。また、授業体験を必須にすれば、前後の計画も併せて行っていかなければいけない。この事業が恒常的に続いていくのならば、校務分掌上に担当を位置づけておく必要があると感じた。
- 県外大学に在籍した新規卒採用予定者は、山口県教育の現状にふれ合う機会も少なく、例えば「やまぐち学習支援プログラム」「板書型指導案」「学力向上推進教員」など、独自の取組、制度に関する知識も少ない。県内大学に在籍し、ボランティア、教育実習で山口県教育にふれている新規卒採用予定者の差は大きく、短期連続型で10日程度の実施が望ましいと考える。
- 継続した実施を望みます。

学校の教員養成力の向上を図る研修会の実施状況

1 趣旨

県内のどの学校においても、教育実習や学校体験制度、採用前教職インターンシップで充実した指導が行えるよう、受入校の担当者を対象とした研修会を実施し、教育現場における教員養成力の向上を図る。

2 事業内容

○概要：学校体験や教育実習、採用前教職インターンシップの受け入れ、実施する際の留意事項（受入体制、留意事項）について、学校体験制度や採用前教職インターンシップ参加者の報告や平成24年度末に各学校に配付した「教育実習実施に当たってのガイドライン」を通して説明。

（県教委・山口大学教育学部教育実習部・山口大学教育学部附属学校）

○期日及び時間：平成26年10月6日（月） 午前9時から午後3時50分

○参加教員数：計92人

会場	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校	合計
山口大学附属山口小学校	17	0	0	0	17
山口大学附属山口中学校	0	24	8	0	32
山口大学附属光小学校	13	0	0	0	13
山口大学附属光中学校	0	4	15	0	19
山口大学附属特別支援学校	0	0	0	11	11
合計	30	28	23	11	92



○研修会の内容

- （講義）教員養成に係る取組及び教育実習生に対する意識調査について
- （事例発表）採用前教職インターンシップ等に参加して
- （事例発表・協議）学校における教員志望学生の指導に当たっての留意事項
- （研究協議）学校体験、教育実習、採用前教職インターンシップ実施の在り方・大学生への指導の在り方
- （見学）教育実習生の授業参観〔教育実習生の授業参観に基づいての協議（特別支援学校のみ）〕
- （講義・協議）附属学校での教育実習生指導上の留意事項、教育実習生を送り出す大学が委託実習受入校に期待すること

3 事業成果

- 学校体験制度、教師力向上プログラム、教育実習、採用前教職インターンシップと続く教員養成に係る取組のそれぞれの意義が理解され、学生が学校・教室に入っているいろいろな立場から指導していくことがあたりまえになってきている現状について共通理解が図られた。
- 人材育成に努めなければならない現状や全校体制で教員養成の取組を進めていく必要性について、共通理解が図られた。
- 教員志望学生への指導を通して自らの教育活動を振り返るなど、児童生徒の成長や学校の活性化だけでなく、教職員の資質能力の向上にも大きな役割を果たしていることを認識できた。

学校の教員養成力の向上を図る研修会の実施状況

4 事業成果を踏まえた今後の方向性（成果の普及）

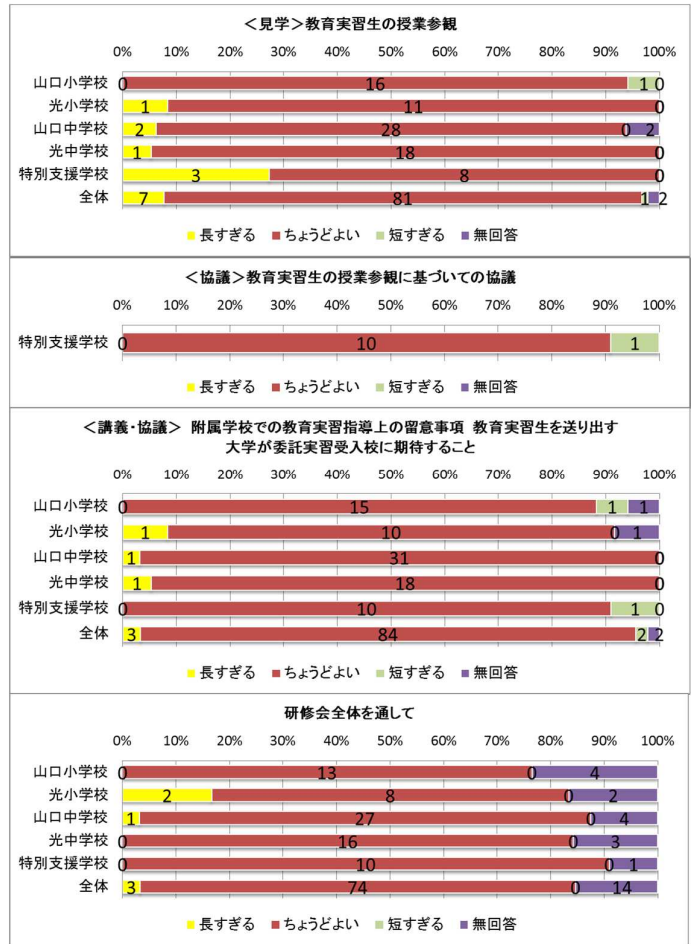
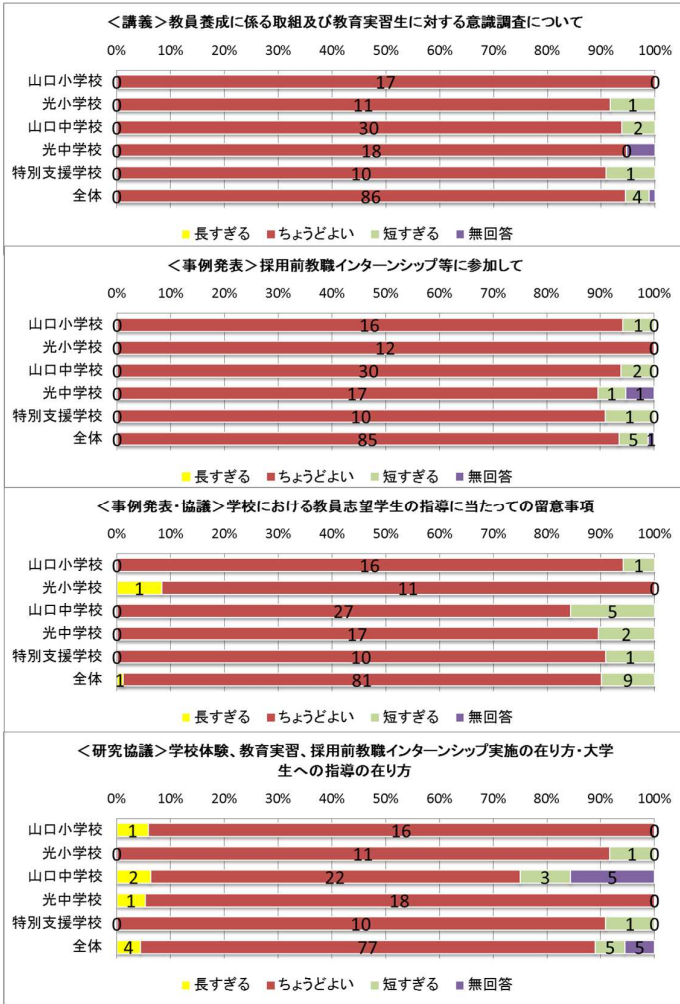
○平成25年度実施の「教育実習研修会」、平成26年度実施の「学校の教員養成力の向上を図る研修会」の取組を通して、教員志望学生の指導に際しての基本的な考え方や、指導内容・指導方法、さらには指導に当たっての留意点等について共通理解が図られるとともに、学校も教員養成に積極的に関わることの必要性について共通理解が図られた。今後は研修会を通して得られ成果を学校現場での指導に生かしていただけるよう、成果の普及に努める。

5 アンケートにおける主な意見

- 教育実習生のニーズ調査の結果や採用前教職インターンシップに参加された先生の話から、教職に就きたいと願っている実習生が求めていることがわかり、教育実習プログラムや校内体制でどの点に気をつけたらよいか考えることができた。事例発表は具体的で参考になり、教育実習生が実習に来てよかったと思うことができるように全校体制で取り組むことを学校に戻っても伝えていきたい。
- 実習生をよき教師にしていくためには、我々の意識改革が必要である。人に授業を見せて、見せられる様に、研究することが重要。我々の積み重ねて来たものを、伝えていくことが私たちの使命である。
- ミドルリーダーとして、自分自身が学校を運営し、次の担い手を養う重要な立場になりつつあることを自覚できた。
- 教育実習に関して他校の実情を聞くことができ参考になった。教育実習の内容や計画の立て方、校内体制づくりについて他校の先生方と話す機会がないので、貴重な時間となった。
- 学校体験制度・教育実習・教師力向上プログラム・インターンシップと続く教員養成に係る取組のそれぞれの意義を考えながら、学生が学校・教室に入っているいろいろな立場で指導していくことがあたりまえになってきている現状を実感した。と、同時に、「だれもが指導にかかわれる教育実習のノウハウの構築・引継ぎ」が、全校体制での組織的な取組を活性化していく上でキーポイントとなることを感じた。
- 昨年の研修会よりも内容的にとっても充実したものであった。特に教員養成に向けての県の動きを知ることができ、有意義であった。教育実習の目的を見ても、結局は、教員の資質向上の目指すところと同じであり、学校の体制づくり、組織力の向上の重要性を改めて感じることができた。
- 教育実習や学校体験制度、教職インターンシップ等について、他校の担当者や情報交換及び協議を行うことができ、とても参考になった。特に人材育成の視点から教育実習等の意義を示し、学校全体で十分な共通理解を図ることが重要であると感じた。
- 「教育実習実施に当たってのガイドライン」の活用の仕方がよく分かった。採用前教職インターンシップの大切さがよく分かり、今後協力していきたいと思った。また、実習生等を受け入れることは、自身の資質向上にも役立つと改めて気づかされ前向きに取り組むたいと思った。
- 若手の力を上手に活かすことで相互の人材育成を図っていくとよいことを本日の研修会で学んだ。

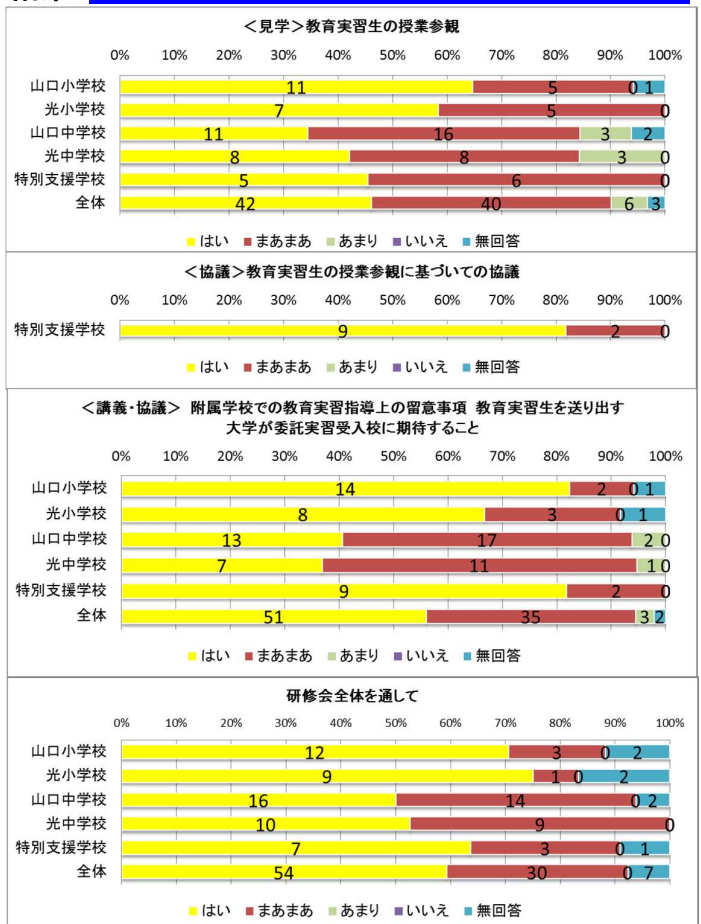
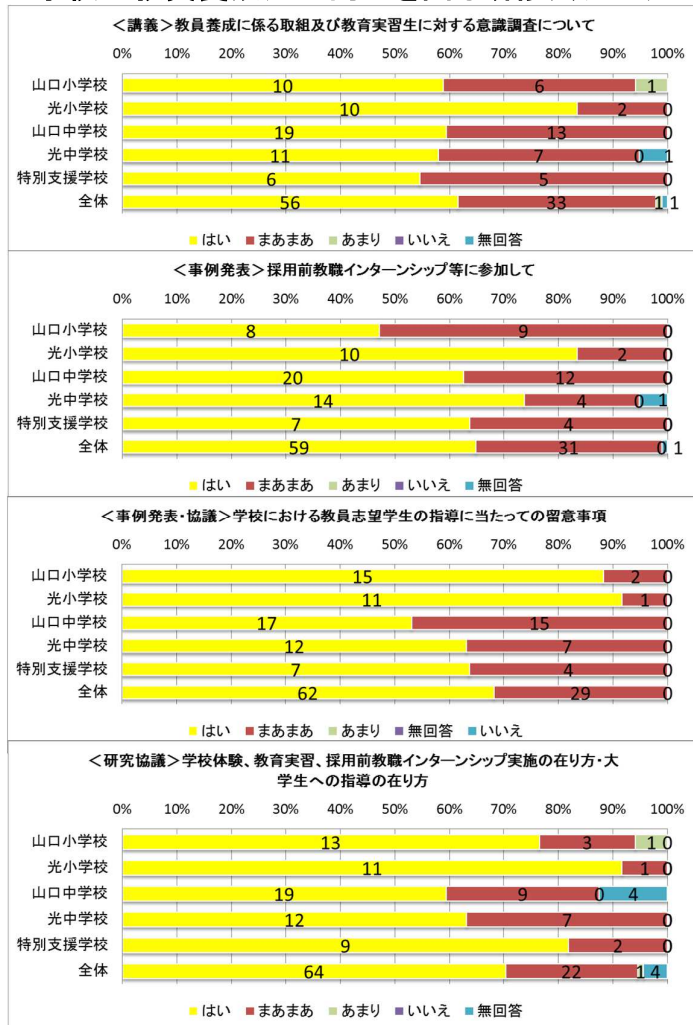
学校の教員養成力の向上を図る研修会アンケート結果

各内容の時間配分は適当でしたか。



学校の教員養成力の向上を図る研修会アンケート結果

この研修はあなたにとって役立ちましたか。



スクールリーダー研修講座の実施状況

1 趣旨

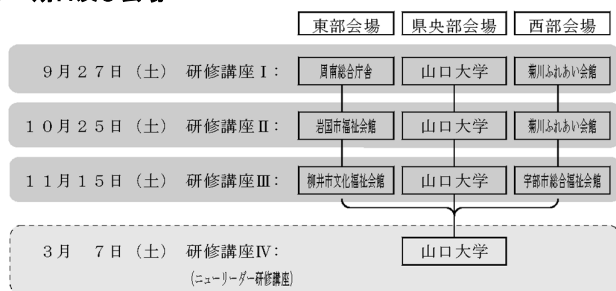
スクールリーダーとしての基礎的な資質能力を養うとともに、その職務の重要性に関する理解を深め、本県のスクールリーダーとして学校を牽引する意欲を高める。

2 対象者

- ・学校運営に関する資質能力を身に付けたいと考えている教職経験10年以上の教職員(本年度、教頭候補者選考試験を受験する者)のうち希望する者
- ・受講を希望する一般中堅教員・事務局職員

希望者校種	小学校	中学校	高等学校等	合計
人数	245	153	49	447

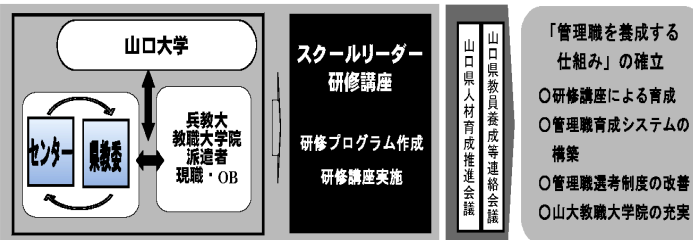
3 期日及び会場



4 参加人数

	東部会場	県央部会場	西部会場	合計
研修講座I	136人	144人	112人	392人
研修講座II	114人	136人	107人	357人
研修講座III	121人	142人	122人	385人
研修講座IV	県央部会場 170人(予定)			

事業推進イメージ図



スクールリーダー研修講座のプログラム作成過程

- 兵庫教育大学派遣者現職部会
平成26年6月24日(火):兵教大
○スクールリーダー研修会の基本的内容の協議
→ 5日間プログラム原案の作成
- 兵庫教育大学派遣者OB部会
平成26年8月13日(水):県庁
○スクールリーダー研修講座の内容協議
・国の教育政策に関する理解の必要性
・山口大学の参画について
・研修の在り方について(講義と演習の組み合わせ、自校での取組)
・やまぐち総合教育支援センターとの連携の在り方
- 研修講座原案作成部会
平成26年8月20日(水):県庁
○研修講座の原案の最終検討
・学校評価に係る研修の必要性
・市町教委における研修との関係
・演習における指導者の必要性
・さらに若いミドルリーダー育成の必要性
- 「山口県人材育成推進会議」
平成26年9月11日(木)
○県教委の事業説明及び管理職候補者やミドルリーダーの育成のための研修についての意見交換

研修講座 I

1 目的

- (1) 本県の教育行政の概要及び特色、喫緊の課題に関する理解を深める。
- (2) 本県の地域と連携した教育の中核である「地域協育ネット」と「コミュニティ・スクール」の取組についての理解を深める。

2 期日及び時間

平成26年9月27日(土) 10:00~15:30

3 内容

- (1) 講義:本県の教育課題と施策

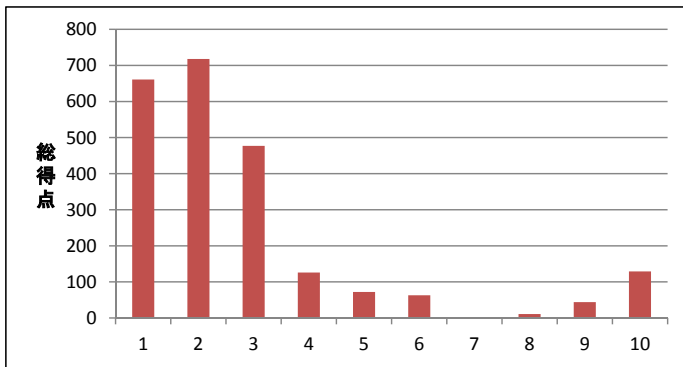
- ①本県の教育施策
- ②人材育成
- ③特別支援教育
- ④いじめ問題
- ⑤学校安全
- ⑥食育
- ⑦体力向上
- ⑧高校教育
- ⑨学校評価・網紀保持



- (2) 講義演習:地域と連携した教育(社会教育・文化財課)

- ①学校と地域の連携・協働による教育の連携について
- ②演習:熟議「地域の人が行きたくなくなるような学校とはどのような学校か」

■あなたにとって今後の職務に役に立つと感じたものはどれですか。



- 1 本県の教育施策
- 2 人材育成
- 3 学力向上
- 4 特別支援教育
- 5 いじめ問題
- 6 学校安全
- 7 食育
- 8 体力向上
- 9 高校教育
- 10 学校評価・教職員の網紀保持



■講義「本県の教育課題と施策について」で学んだこと

- 県の施策について、これまで読んだだけでは十分には理解できなかった点が、今日の説明を伺って、なぜこの施策が必要なのか、取組の理由がよく分かった。他の教職員に自分の言葉で説明し、校内の教職員で同じ方向に向かって進んでいきたい。
- これまで、県の施策と学校の取組のつながりが意識できなかったり分からなかったりしたことがあったが、講義によって県の施策を知り、それによって学校の取組をより効果的に仕組む必要性を感じた。
- 子どもの望ましい成長に関わるあらゆることがこと細かく計画され実施に向けて動いているということに改めて感じた。自分の視野が本当に狭いことが分かった。
- 国・県の教育基本計画は、全ての教育活動を活性化するための軸として十分に理解、実践、具体化することの大切さを改めて学んだ。
- 今までは、校務分掌において自分の役割を意識した仕事のモチベーションの方が強かったが、市教委・学校・地域が同じベクトルで目標に向かっていこうとする意欲を中堅リーダーとして持つことの重要性を感じた。
- 自分の校種が高校ということもあり、義務教育の取組の状況が分かるとともに、それをいかに高校教育につなげ、生徒達の将来へ活かしていくかについて考える機会となった。

■講義「本県の教育課題と施策について」で学んだこと

- 人材育成（若手育成）がこんなにも差し迫った課題だったとは勉強不足、認識不足であった。
- 様々な施策には、これまでの変遷や時代背景、法的根拠があることを改めて実感した。目前にあるものだけでなく、より広く深い視野を持って職務に当たりたいと思う。
- 毎年4月の自己目標シートやマネジメントの作成の際には、教育振興計画を見直す必要があるということ学んだ。
- 大量退職、大量採用の時代を迎え、教育水準を保つための人材育成に自分自身責任感を持って取り組む必要性を感じた。
- 本県の施策を理解し、各校で人材育成をしっかりとやっていくべきだということを実感した。本腰を入れて取り組まないといけないと思う。管理職からの指示や提案がなくても、校内をリードしていきたいと考えた。
- 学校での様々な取組の根拠がよくわかり、今後の実践に自信を持って 取り組めそうな気がする。

■講義・演習「地域と連携した教育」で学んだこと

- 一人ひとりが声を出し知恵を出して考えることの大切さを痛感した。コミュニティ・スクールして地域の方々ともしっかりと話す機会を持つべきだと学んだ。
- 地域との連携のためには、学校の垣根を低くし、地域の方と一緒に話し合うことが大切だと感じた。ともにめざす子ども像を語り合い、その実現に向けてできることを考えていきたい。
- 地域協育ネットとコミュニティ・スクールとの区別・関係が分かりにくく思っていたが、今日の研修でよく理解ができた。
- 地域の意見を取り入れていくと甘さがそがれ、実行力が付くことが分かった。学校には地域を活性化する力があると改めて感じた。
- 熟議については、初めて経験したが、限られた時間の中で何らかの結論を出していくという方法は、職員会議や職員研修にも取り入れていきたいものだと感じた。
- 校内で地域連携というポジションを頂き努力しているつもりだが、まだまだだと思った。学校に戻って一つでも二つでも企画を立てたいと思う。
- 地域との連携は社会の要請であり、どの先生方も高い意識を持っておられた。その使命感や高い見識に学ぶべきところが大変多かった。
- 様々な校種の先生方と話し合うだけでも多様なアイデアが出されるので、地域の方々のアイデアも入れて、学校、地域のために、そして子どものために企画してみたいと感じた。
- 演習をやりながら、参加者の様々な意見から考えが深まる過程が味わえた。
- 自分は高校なので、小中学校と比べて地域との連携が薄いところもあるが、それでもいろいろな取組が可能だと思った。

■研修講座Ⅰについて

- 自分自身もう一度学び直すきっかけとなる講座であった。
- 身が引き締まる、そして思いを強くする一日となった。
- 本日の講座をもとに、学力向上、人材育成、地域連携について再度勉強し、自分の考えを明確に持てるようにしたい。
- 現在の自分の業務だけでなく、より広い視野で、より大きな立場で学校づくりに貢献したいと改めて感じた。
- 理論と実践とが一体となった研修なので、大変有意義である。
- 目の前の子どもを見て日々の業務にあたってきたが、県の取組を踏まえて学校をどのように運営していくべきなのか、新たな課題を持つことができた。
- キャリアの近い先生方と熟議することができ、大変有意義な講座であった。このような機会がもっとあるとよい。
- 研修意欲にあふれる先生方と過ごした時間は貴重だった。勉強が足りないことを痛感した。
- 小、中、高等各校種のしかもスクールリーダーという意欲ある中堅教員の方々との協議は大変意義深いものであった。
- 県の施策（方向性）を学んだこの研修講座Ⅰを踏まえながら、学校経営に係る研修である講座Ⅱに参加したい。楽しみにである。

研修講座Ⅱ

1 目的

- (1) 学校組織マネジメントの概要について理解する。
- (2) 学校の現状分析、学校経営ビジョンの構築方法について理解する。

2 期日及び時間

平成26年10月25日（土） 10:00～16:30

3 内容

- (1) 講義：学校組織マネジメントの概要
- (2) 講義・演習：SWOT分析、我が校のミッション探索

4 講師

東部会場：京都教育大学大学院 教授 竺沙知章
県央部会場：兵庫教育大学教職大学院 教授 浅野良一
西部会場：兵庫教育大学教職大学院 准教授 大野裕己



- 浅野教授が県央部会場で使用された講義資料を本県の各校の校内研修等で活用できるよう印刷製本し配付することにした。下は、その資料の「はじめに」の一部である。

「学校組織マネジメントの理論と実践」

本資料は、合計3回の研修講座の中の第2回の講座において実施した学校組織マネジメント研修の資料として、講師の兵庫教育大学教職大学院教授 浅野良一先生が作成されたものです。

研修講座では、本資料を基に学校組織マネジメントについての基礎的理論の講義、学校の環境分析（SWOT分析）の演習を行いました。その後、勤務校に戻って実際に自校の状況を分析し、さらに、次回の研修講座において、分析シートを持ち寄って協議を行いました。

学校組織マネジメントは、組織的な学校運営を進める上で必要不可欠な視点であり、学校運営の一翼を担う中堅教員だけでなく、全ての教員がその視点を身に付け学校運営に参画することが求められます。

この度、講師の浅野先生の御好意により、研修資料を広く県内の学校に配付できることとなりました。校内における学校組織マネジメントの研修等に御活用頂きますようお願いいたします。

- 1 学校組織マネジメントの着眼点
- 2 学校のビジョンづくり
- 3 学校のビジョンの展開
- 4 学校の組織づくり
- 5 学校環境の分析
- 6 研修講座使用ワークシート

■研修講座Ⅱについて

- 学校組織マネジメントについて、ほとんど知識を持っておらず本日の講座に参加したが、講義は具体例を用いての説明で大変分かりやすかった。演習は、理論を具現化することが大変難しかったが、グループで交流することで視野が広がった。
- 学校の経営理論に通じるころが多かった。校長の方針を具現化するために十分な話し合いをしなければならぬ。ミドルリーダーとして、管理職や教職員の願いを一致させていく役割を果たしていく立場であることを自覚し、研鑽に励んでいく所存である。
- 学校組織マネジメントが重要であるとはいうものの、具体的に何をどうすることが明確なビジョンにつながるのか今までよく分からなかった。今回初めてこのような研修を開いて頂き感謝している。ミドルリーダーとして動き、学校を変えていきたいと思う。
- 学校のビジョンが語れる管理職になりたいと強く思った。学校に戻って、校長の学校経営をしっかりと心に留め、ミドルリーダーとして管理職と先生方をつなぐ役割をこれからも続けたい。
- 今回の研修を通して、組織の中で自分の責任の重さを改めて実感することができた。組織はいきなり変わらない、どこかで変わって、だんだん変わっていく。そのきっかけとして飛び出していく役、飛び出していくことをあおる役が自分であることを肝に銘じ、まずは、自分がさらに燃えて、周りを類焼させることに努めていく覚悟である。

研修講座Ⅲ

1 目的

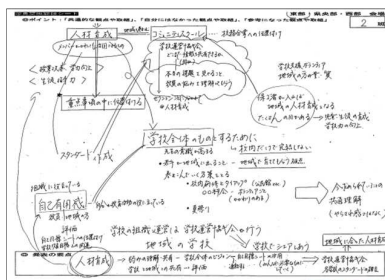
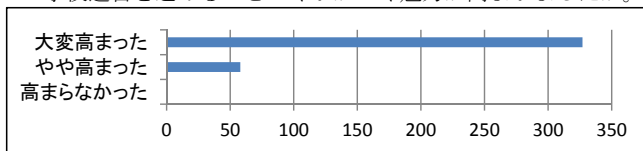
- (1) 学校の現状分析に関する協議を通して、スクールリーダーとしての役割を考える。
- (2) 学校運営に関する講義、協議を通して、スクールリーダーとしての意欲を高める。

2 期日及び時間 平成26年11月15日(土) 10:00~16:30

3 内容

- (1) 協議：学校の現状分析とスクールリーダーの役割
前回講座で学んだ手法を活用して自校の現状分析をした結果を持ちよって協議
- (2) 講義「特色ある学校づくりと組織的な学校運営」
組織的な学校運営を進めている校長による講義
(東部) 下松市立末武中学校 校長 河村則彦
(県中部) 萩市立萩東中学校 校長 池田廣司
(西部) 下関市立豊浦小学校 校長 松永 章
- (3) 講義・協議
「組織的な学校運営におけるスクールリーダーの役割と魅力」
本年度の小中高の新任教頭による実践発表及び協議
各会場：小学校3部会・中学校2部会・高等学校1部会
- (4) 研修の振り返り

■午後の講義・協議から、スクールリーダーや管理職として、学校運営を進めることのやりがいや魅力が高まりましたか。



自校の現状文政の結果を持ち寄っての協議で作成した記録シート



■演習「学校の現状分析とスクールリーダーの役割」について

- 各各種の先生方と協議を行うことで、改めて小学校が担う役割について考えることができた。子どもを教える、育てるには「連携」というものがどれほど重要であるか再認識した。
- 予め出されていた課題で、学校の使命や強み、弱み、重点的な取組を考えてきたために、小・中・高それぞれの根本的な考えに触れることができた。
- 今までは、既にある教育活動をいかに効果的に行っていくかという視点が大部分を占めていたが、学校分析から「新しいアイデア・取組」を考えるとという別の視点に目を向けることができた。

■講義「特色ある学校づくりと組織的な学校運営」について

- 「組織を変える」とは言っても、実際にどのような視点で改善すべきか、判断が難しいと思っていたので、今回、具体的な実践の内容を聞いて大変参考になった。
- 学校を、教育を牽引する者は常に自問自答して、本をよく読み、自分で考えてより良い方法を導き出すことの重要性を感じた。
- 学校運営に於いて組織力は大切であるが、その組織力を高めていくためには強いリーダーシップが必要であることを学んだ。

■講義・協議「組織的な学校運営におけるスクールリーダーの役割と魅力」について

- 新任教頭としてのやりがい、つぶやきが本当に生の声で、新鮮に聞くことができた。教頭職は大変だが、やりがいのある職だと、話を聞いて再確認できた。
- やりがいをもって明るく元気に職務を遂行されていることがひしひしと伝わってきて、教頭職に魅力を感じる事ができた。
- 新任教頭の方の生の話はとても興味深く聞かせて頂いた。同じ女性としても生き生きとされていることにとっても感銘を受けた。

研修講座Ⅳ(ニューリーダー研修講座)

1 目的

管理職としての基礎的な資質能力を高めるとともに、その職責の重要性に関する理解を一層深め、本県のニューリーダーとして学校を牽引する意欲を高める。

2 期日及び時間 平成27年3月7日(土) 13:00~16:30

3 対象者

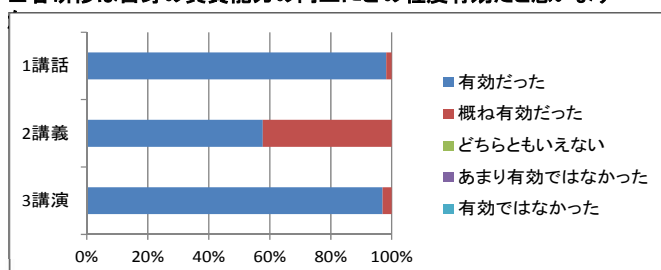
- ・平成27年度教頭候補者名簿登載者
- ・平成27年度に教頭昇任する予定の昨年度教頭候補者名簿登載者
- ・平成27年度に教頭昇任する予定の部主事

4 内容

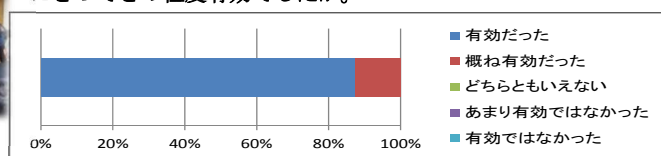
- (1) 講話「新任管理職に期待すること」
教育次長 小西哲也
- (2) 講義
「山口県教育の最新情報 これからの山口県」
- (3) 教育と『未来開拓チャレン ジブラン』等」
教育政策課主幹 近藤和彦
- (4) 講演「管理職(教頭)のリーダーシップについて」
兵庫教育大学教職大学院 教授 日渡 円



■各研修は自身の資質能力の向上にどの程度有効だと思います



■スクールリーダー研修講座は、管理職として着任するあなたにとってどの程度有効でしたか。



■新任管理職に期待すること

- 管理職としての心構えについて具体例を挙げながら教授頂き、身が引き締まる思いである。大切なのは、目の前の子どもであるという言葉に肝に銘じ、ぶれない信念を持ち、真摯に教育活動に取り組んでいきたい。
- 特に「相手を大切にすること」、行動の基本としての「真摯さ」を心がけていこうと強く思った。校長の学校経営方針を十分理解するとともに、学校の課題解決に地域を巻き込んで地域が認めてくれる学校づくりに全力で取り組みたいと思った。

■「山口県教育の最新情報」

- 活力みなぎる山口県の実現をめざすための様々な施策の現状・動向・変更点について詳しい説明を受けることができた。今後も最新情報に敏感であることをしっかりと心がけていこうと思う。
- 県の進める重点取組を知ることで、県の現状やニーズをしっかりと把握できるとともに、根拠を持って教職員に語り、職員のやる気や自信を引き出したい。

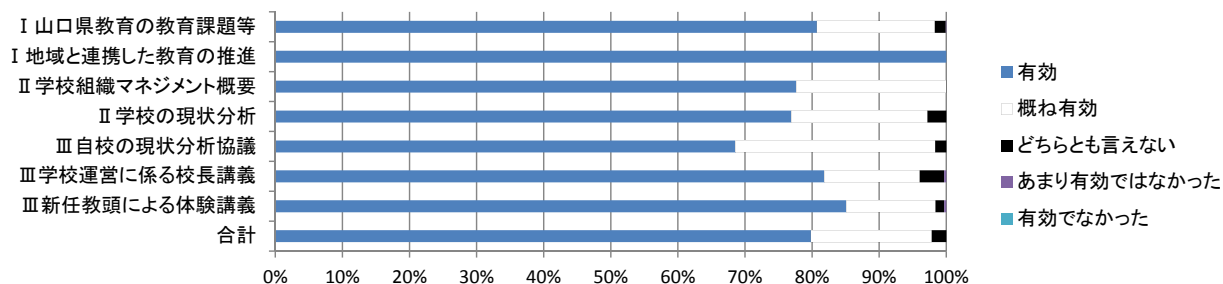
■講義「管理職のリーダーシップについて」

- 大転換点に管理職となる意識を持つことができた。自分の価値観の転換を図ることを常に意識しておくこと、情報収集、分析と地域の学校との関連を密接にしておくことが、自分の中にしっかりと残った。
- 教育委員会制度がなぜ変わったのか、本質的な意図を教えてください。社会が大きく変化したことともない価値観を変えていく努力を管理職は肝に銘じなければならない。自分たちが新しい教育に変えていくという使命があることへの不安を希望に変えられるよう努力したい。
- 自分が管理職の役割を小さく捉えていたことを思い知らされた。教育会全体を見て動く、同じことを続けるのではなく改革者の意識を持つことを学んだ。

成果と課題

- 研修講座終了時のアンケートでは、「本研修講座が有効又は概ね有効だった」とする者が98%を超え、受講者のニーズに応えることができたと評価している。
- また、スクールリーダー研修講座は、本年度管理職選考試験を受験する者を主たる対象として実施しているが、教頭候補者選考試験の面接委員からは、受講者の面接における発言内容が昨年度に比べて、一段と充実していたという感想が挙げられており、本研修講座により受講者の意識と資質能力は確実に向上したと考えている。（教頭選考試験の名簿登載者を対象としたニューリーダー研修講座後のアンケートでは、受講生全員が「管理職として着任する自分にとって、スクールリーダー研修講座が有効又は概ね有効だった」と回答している。）

研修講座の有効性について



- 研修講座IIでは、学校マネジメント研修として学校の現状分析の手法について学び、研修後自校に戻って実際に分析を行い、さらに研修講座IIIで分析結果を持ち寄って協議を行った。研修講座での学びを、自校の学校改善に生かし、さらにその成果を次の研修につながる研修方法は非常に有効である。研修講座の取組が、受講者の自校における日常的な学校改善に結びつくようなプログラム開発を継続し、本県における研修のモデルとしていきたい。
- また、現在、本年度のスクールリーダー研修講座における学校組織マネジメント研修の成果を生かし、やまぐち総合教育支援センターの中堅研修の見直しに着手している。センターとの連携により、次年度から「学校の組織力の向上に係る研修」を新規設定し、管理職選考を受ける前の中堅期から計画的に組織マネジメント力の育成を図っていく。引き続き、スクールリーダー研修講座の拡充をセンター職員と連携を深めて進め、スクールリーダー研修講座とやまぐち総合教育支援センターにおける中堅教員研修とが一体となった管理職育成の在り方を研究していく必要がある。さらには、管理職研修と管理職選考試験を関連付けた選考の在り方についても研究していきたい。
- 本取組は、平成28年度に山口大学に設置される予定の教職大学院の取組の充実もその目的の一つとして掲げている。山口大学教職大学院は、学校現場の課題解決プロジェクト研究を核としており、県内の学校や地域が抱える教育的諸課題、本県教育が有する先進的・革新的取組等を取り扱う授業科目の開設や行政研修等を積極的に活用する授業を取り入れるとしている。本県教育の推進に資する山口大学教職大学院のカリキュラムの充実が一層図られるよう、引き続き、本調査研究事業を活用した取組を継続し、山口大学との連携を深めていきたいと考えている。

山口県教員養成等検討協議会設置要綱

山口県教育委員会

(設置)

第1条 山口県の教育の振興に向けて、本県教育の担い手である教員の養成や採用及び現職教員の育成など、大学等と連携した取組を進めるため、山口県教員養成等検討協議会（以下「協議会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第2条 協議会は、次に掲げる事項を検討する。

- (1) 大学等と連携した教員の養成のあり方に関する事
- (2) 大学等と連携した教員の採用のあり方に関する事
- (3) 大学等と連携した現職教員の育成のあり方に関する事
- (4) その他、大学等と連携した取組に関する事

(委員)

第3条 協議会は、別表に掲げる委員により構成するものとし、山口県教育長が委嘱する。

- 2 委員の任期は1年とし、委員が欠けた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 3 委員は再任されることができる。

(会長及び副会長)

第4条 協議会に、会長及び副会長を置く。

- 2 会長は、委員の互選により選出し、副会長は、会長が指名する。
- 3 会長は、会務を総理し、協議会を代表する。
- 4 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代理する。

(協議会)

第5条 協議会は、会長が招集する。

- 2 協議会の議長は、会長をもって充てる。
- 3 協議会は、委員の過半数が出席しなければ開くことができない。
- 4 会長は、必要があると認めるときは、委員以外の者を会議に出席させ、その意見を求めることができる。
- 5 協議会の所掌事務について研究するため、必要に応じて研究部会を置くことができる。

(庶務)

第6条 協議会の庶務は、教育庁教職員課において処理する。

(その他)

第7条 この要綱に定めるもののほか、協議会の運営について必要な事項は、山口県教育長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成25年9月27日から施行する。

附 則

この要綱は、平成26年7月15日から施行する。

山口県教員養成等検討協議会 委員一覧（第3条）

（五十音順 敬称略）

氏 名	所 属 等
天 野 かおり	下関市立大学准教授
石 橋 孝 明	徳山大学福祉情報学部長
大 塚 ゆかり	周南市立周陽中学校長
岡 野 亮 介	至誠館大学学生部長
岡 村 康 夫	山口大学教育学部長
金 田 重 之	山口学芸大学・山口芸術短期大学 エクステンションセンター長
甲 原 定 房	山口県立大学教授
佐 伯 里英子	宇部フロンティア大学人間健康学部准教授
迫 田 裕 子	東亜大学人間科学部講師
貞 末 俊 裕	梅光学院大学文学部特任教授
中 村 哲 夫	萩市教育委員会教育長
日 渡 円	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教授
福 田 廣	山口東京理科大学工学部教授
牧 野 共 明	山口短期大学副学長
松 田 伸 宏	山口市立白石小学校長
松 根 健 治	山口県立岩国高等学校長

